東京市富士見小學校長

小關源助著

入學受驗綴方自習書

（六學年自習用）

中學校
高等女學校
幼年學校
實業學校

東京

三友堂書店發行

937
194

特26
30

中學校 高等女學校 幼年學校 實業學校 入學受驗綴方自習書

（六學年自習用）

東京市富士見小學校長 小關源助著

東京 三友堂書店發行

一

最も評判のよい入學準備書必ず入學できる

入學受驗國語自習書（忽ち五版）
前東京高等師範學校訓導兼福井清著
中學校 高等女學校 幼年學校 實業學校
洋裝定價貳拾五錢 全壹冊 郵稅四錢

入學受驗算術自習書（忽ち四版）
前東京高等師範學校訓導兼福井清著
一ヶ月速成 中學校 高等女學校 幼年學校 實業學校
洋裝定價貳拾錢 全壹冊 郵稅四錢

入學準備算術書（好評九版）
早稻田中學校同高等豫備校講師 高見豊、武川鏡三郎共著
中學校 高等女學校 幼年學校 實業學校 附各學校入學試驗問題集
洋裝定價參拾錢 全一冊 郵稅四錢

入學準備作文書（好評六版）
東京府立第一中學校教諭 岡田武熊著
中學校 高等女學校 幼年學校 實業學校
洋裝定價貳拾錢 全壹冊 郵稅四錢

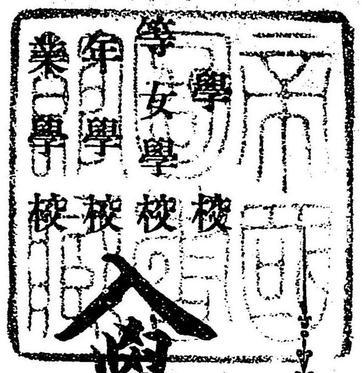
東京府各學校入學試驗問題及答案（最新刊）
四十四年度
洋裝（定價四十四年度分拾五錢 四十三年度分拾五錢 四十二年度分八錢）
全壹冊 郵稅各二錢

發行所 東京振替口座 東京區 早稻田鶴卷町 三友堂書店 二四五五番

府26
30

東京市富士見小學校長 小關源助著

中高幼實



入學受驗級方自習書

（六學年自習用）

東京 三友堂書店發行

44.12.27

目次（ミヅ）

上篇　普通文

第一　文の構成法（コウセイハフ）の一……一頁
　甲　両括式（リヤウクワツシキ）……一
　(1)　模範（モハン）……一
　(2)　説明（セツメイ）……一
　(3)　作例……一
第二　語句の變化……二
　第六學年の學科……二
　藤樹先生と召使の別……四
　(1)　模範――瀬戸内海の一段……六
　(2)　説明……六
第三　短文の練習……七
　練習文（レンシフ）――學校の紀念日……八

第四　文の構成法の二……一〇
乙　頭括式……一一
(1)模範……一一
(2)説明……一一
(3)作例……一二
第五　叙事文……一二
(1)模範……一二
(2)説明……一三
(3)作例……一三
第六　甲　短文……一三
夏の月　高山樗牛……一三
乙　長き文……一四
月と光と　幸田露伴……一四
第六　構成を変化する法……一五
(1)説明……一六
(2)作例……一六
第七　甲　叙情文……二六
夏の夜　児島高徳……二六
(1)模範……二六
(2)説明……二八
(3)作例……二八
乙　長き文……二九
琵琶と妹……二九
櫻……三〇
第八　叙事文と叙情文とのまざり……三一
(1)模範……三一
(2)作例……三一
英雄的行動……三一
第九　記事文……三三

(1) 模範……一三
(2) 説明……一三
(3) 作例
甲 短文……一三
旅だより……一三
旅行記の一節……一五
夏の月……一五
乙 やゝ長き文
夕照……一六
我が國の首府……一七
第十 文の構成法の三……一九
丙 尾括式……一九
(1) 摸範……一九
(2) 説明……一九
(3) 作例……一九

柳……三〇
備後神邊城の戰……三〇
ホシが出た……三一
我が志願……三一
第十一 文體を變ふる法……三三
(1) 説明……三三
(2) 作例
柳……三四
短句●短文の變化……三五
八月三十一日……三八
第十二 説明文……四〇
(1) 模範……四〇
(2) 説明……四〇
(3) 作例
教育勅語……四〇

牛……四二
蝶と蛾……四四
租稅……四五
雁……四六
第十三 擬人法
(1)說明……四八
(2)作例
十錢銀貨の物語……四八
第十四 誤り易き漢字と假名遣……五〇
第十五 雜
紀行文の一節。各地の被害。四季折々の中。
山田古嗣。日を愛む。伊達政宗。

下篇 日用文

第一 旅行先の父に送る手紙……五九

第二 暴風雨見舞の文……六〇
第三 病氣見舞の文……六一
第四 入營する友に送る……六二
第五 友人の入學を祝ふ文
入學を祝はれたる返事……六三
第六 案內文……六四
第七 招待狀
其の一 誕生祝の招待。返事……六五
其の二 法會の招待……六六
第八 問合文……六七
其の一 入學試驗期日。返事……六七
其の二 地圖發行所問合。返事……六九
試驗及第を恩師に知らする文……七〇
第九 借したる品物の催促。返事……七一
第十 日用文語との對照表……七二

第十一　練習文
續篇　入學試驗問題文例
第一　我が家……八一
第二　我が家……八三
第三　わが好める事物……八五
第四　余が卒業したる學校……八八
第五　書物の借用を乞ふ文……九〇
第六　轉居を報ずる文……九二
第七　外の諸題……九三

目次終

はしがき

(一) 綴方は先生も生徒もずゐぶんと難儀をする。自習用の本もあるが、多くは作例などを示してあるのみで、他の學科、たとへば算術で、小數をおぼえて、次に分數に進むといふ具合に**あたりがつかなくて困る**から、私がふだん生徒に教へて居る事をまとめて、多くの生徒の便宜になるやうな本にしてくれと、此の本を書いたのであります。私は眞面目な御勸をまじめにいたしたまでゞ、あります。それから、おひ〳〵と研究して改良する必要があると思つて居ります。

(二) 人々の考はどうあらうと、小學校の國語科（綴方も）は教科書にたよるべきでありますから、**讀本にもとづいて**作文の力を進めるやうにしました。

(三) **上の欄**の語句は、五年以上の讀本から（四年以下のもまゝあり）拾ひ出して、

生徒諸君の分り易い種類に分けたのであります。

(イ) 常に此の語句を見て、文を綴るときに用ひよ。

(ロ) 語句の種類は其のおもな部分にあげたので、一つの言葉もいろ〳〵な場合に用ふることが出來るから、覺えた言葉はなるべくはたらかせるやうにせよ。

●例 「壯觀名狀すべからず」。

「直下七十丈の水は絶壁に水晶のすだれをかけ、壯觀名狀すべからず」といへば地理(瀑布)の文となり、

「敵艦續々火災を起し、火煙海をおほひ、水ほどばしりて、壯觀名狀すべからず」といへば海戰(歷史)の文となる。又、

例。「靜かなり」といふ言葉。

「擧動落つきて、言葉靜かなり。」——人物。(修身にも歷史にもなる。)

「瀧はいよ〳〵小、境は益々靜かなり。」——地理。(風景)

(四) 本書に示した**文例**は、教科書にある字句で出來て居るものか、又は其に近い文を選びました。

(五) 字や畫は幾度も習はなければ上手にはなれません。其と同じやうに文も多く作らなければ進歩しないから、「**設問**」にある題で練習しなさい。なほ、常に見聞した事、感じた事、考へた事などを文に書きあらはすけいこも大切であります。

(六) **下の欄の「注意」**は、教科書で分つて居るべき事が多いから、よく出來る人は、なるべくあてにしない方がよい。

附

上欄の語句を拾ひ分けるに就いては、數人の先生が骨を折られた事を記して置く。

綴方の注意

一、題の主意をよく考へよ。（題外れにならぬやうにせよ。）
二、よく順序を立てよ。（本書構成法を見よ。）
三、なほ、始めから終まで考をまとめてみよ。
四、考がよくまとまつたら筆をとれ。
五、言葉をよくぎんみせよ。
六、氣のりがしなければよい文が出來ぬ。
七、作り終つたら、よくぎんみせよ。―大切な事がぬけてないか。むだな事がないか。よく順序が立つて居るか。漢字・假名遣が違つて居ぬか。文語と話語とがまざつて居ぬか。句讀點にもきをつけよ。

◉語句集

（國語讀本にあるもの）

◉(一)修身（漢字ハ讀本巻名、數字ハ課名。）

▲個人ニ關スルコト

病は口より入る●不潔●入浴●我は天氣にも相談せず毎日運動す●過ぎたるは及ばざるが如し●よく日光の見舞ふ家には醫者は見舞はず●酒煙草の害は今更に云ふまでもなし。（九、17）
金錢を安全に貯ふるには郵便貯金をなすを第一とす●貯金通帳●貯蓄銀行。（九、22）
見上げたりつばな行●さぞ面白からう。（九、24）
親切●温順なることをよく現してをる。（一〇、11）やさしき心●死力を盡して漕

上篇　普通文

第一　文の構成法の一

甲　兩括式

(1)模範。

國語讀本巻第十、第二十一課、人の身體。（尋常五年の末に學んだ所です。）

(2)說明。

「第二十一課人の身體」の構成は左の通りです（本を見よ）

頭 第一段――（其ノ上ヲオホフ。まで）からだ全體をまとめて書いてある。

胴
第二段――肺●心臟の事。（循環機）
第三段――胃腸●等の內臟。（消化機）
第四段――腦は精神の宿る所。

◉注意

●●●構成法テカタ　クミタ　人にお話しをしたり、文は、說明などする時に、ことばの順序ジュンジョを立てることが必要である。其と同樣に文を綴るにも其の順序を立てなければならぬ順序よく文をくみたてるしかたを文の構成法といふのです。

●●●兩括式の注意　(一)身體にたとへれば、頭、胴、脚と分げる事が出來る

進む。有らん限の勇氣をふるふ。（一〇、19）

煙たなびくとまやこそ我がなつかしき住家なれ。來らば來れ恐れんや。（一一、6）

ひとり心に思ひ定めたり。思はず大聲をあげて泣號びぬ。（一一、10）

親子。兄弟。姉妹。身體の健全を喜すれば氣氣も亦おとろへて笑ふことすくなし。

公明正大にして心中一點の曇なし。肉に省みてやましきことなし。常に其の行をつゝしみ、上天に耻ぢず、下地に耻ぢず、外人に耻ぢず、內已に耻ぢざる工夫をなすべし。他人の惡事短所をあざけり笑ふは己れの品位を下す所以なり。他人の獸心を買はんとして、へつらひ笑ふは其の心事最もいやしむべし。信實の心。

身を立て父母をあらはす。產を破り祖先をはづかしむ。一寸の光陰も輕んずべからず。古人の片言隻句も我等が師なり。（一一、17）

苦あれば必ず樂あり。樂あれば必ず苦あり。少壯有爲。世を憤り人をねたみ、身をはかなみて自ら苦しむは百害あるも一利なし。優柔不斷。快活なる精神。（一一、18）

▲家庭ニ關スルコト

長者の命のまゝに拾ひとりて、さゝぐ。（一〇、7）

眠れる父をゆり起して、心ならずも。（一〇、9）

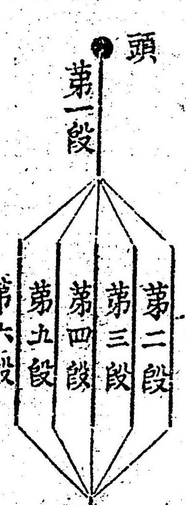
幼き身を暗一人やらんも心許なし。己が家に速れ歸りて、樣々にいたはる。（一一、10）

第五段——腦と身體、はたらき。

附。重要な機關の保護。

第六段——筋肉は用ふれば發達す。

第七段——身體を大切にすべき事。



(3)作例。次に示す文は、兩括式によりて尋常六年生の作つたものです。（先生と生徒とで少し直しました。）

第六學年の學科。（六年生作）

我等の常に守るべき教育の大本は教育勅語なり。我等は我が校の最上級生なれば下級生の模範たる覺悟なかるべからず。

我等の學ぶ學科中、修身は身ををさめ後來世に立つに大切なる教なり。

國語に讀方・綴方・書方あり。讀方にて文字・文章の讀方・意義等を學び。書方はもつぱら筆の練習をし。綴方は文を作る稽古なり。

計算をなすは算術にして。日本歷史にて我が國の昔より今までの變遷を教へらる。又土地をしらぶるには地理・動物・植物・鑛物等をならふには理科あり

圖畫は繪をならひ。細工物を造るには手工あり

唱歌は音聲と心とを美にし、體操は身體を丈夫にするが、かゝる學科を勉強し、身をつゝしみてよき日本人たる

機成で、始と終を括る糸から兩括式といふ

(二)段落は、どこも同じ樣な長さにしてはならぬ。或は長く、或は短く、種々に組み合はせよ。木の葉をかくに、どの枝も同じ大きさにすればみにくい、三ツ組の柿も六中小となつて居るから形がよいのと同じわけである。

ことをつとむべきは我等六年生の本分なり。

注意

(イ)ことばを種々たくみにつかひ分けてある所に注意せよ。「何々でありまず」「何々なり」と同じ語を重ねて用ふる人は下手である。

(ロ)◉のある語に注意せよ。前後をうまくつゞけた手ぎはえらいではないか。

藤樹先生と召使の別。（六年生某）

藤樹は母を思ふ至情からつかへをやめ、伊豫より一人の召使をつれて、なつかしき故郷へ歸りました。

藤樹の家は貧しいので、此の上雇つて置くことができないから、手許にある僅かの錢の中より其の過半を分ち與へ、

●交際　篠身で藤樹と召使の話を學んだでせう。そこで、二人の別れる時のありさまはどんな風であつたらう、情深い先生は、ま

子にくしとはつゆ思はず。（九、7）

祖父様●御障りなく●御身大切に。（九、13）

▲他人ニ關スルコト

色々とやさしく御世話下され（九、7）

話相手●さてはこのまゝには過されじ。（九、14）

驚いて、ひらりと馬から飛下りた●附添人も見物人もきもを冷した●上を下へのさわぎ如何にも見上げたりつぱな行。（九、24）

有無相通ず●不便を省く。（九、25）

極めて親密に生活す●群集生活●共同團結●團體のためには身命をもをしまず。（一一、2）

分業●人は其の身體才能によりて仕事に適不適があ

矣ふ門には綠來る●和合●家業を樂しむ●一家擧つて笑ふべし●家運自ら開く。（一一、12）

孝子の誉●重に行かばからだをいとへ、病に死ぬな●御國のために行きませいざや●をゝしの別。（一一、14）

心ばかりの祝宴。（一一、15）

主婦は老人にいたはりかしづく外幼兒を育て上ぐる大任あり●主婦は家庭和樂の中心となりて、家内一同をやしましむべし●むつまじく打揃うて、夕の膳に向ふ●入るを計りて出づるを制す●身分不相當の活計は產を破り家を亡す基なり不在勝。（一二、22）

實業鋭くしかつた●母は如何にも殘念に思ふ●定めて不自由の事もあらん●我が

「おまへは年をとつてゐるから大切にあつかつてやりたいが、家は見る通り貧乏であるから、やむを得ずなつかしいおまへと別れなければならない」。と言ひました。召使は驚いて顏色をかへ、

「旦那樣とんでもないことおつしやいます。私は金錢を受けやうとは思ひません。どんな難儀でもいたしますから、どうか御側にお置きなさつて下さい。これはぢいが一生の御願でございます」。と涙を流して願ひました。

藤樹はしばらく無言。

やがて老僕をしかるが如くなぐさむるが如く、あつくさとしましたから、老僕は其の金をおしいたゞき、すご〳〵と歸つて行きました。

じめな老僕は、と共の時の事を想像して、六年生が作つたのです。

●良知●良行　生徒の文には良行とあり、「よい行」といふ意味に使つた語でありましたが、良知と先生が直したのです、此は「りつぱ

る。（一一、3）
一村の名譽・品行方正・職務に忠實・手放し難き用。（一〇、8）
隣國の人も閉憶へて之を植え、遂には中國地方全體に及ぶに至れりと云ふ・知るも知らぬも父母に別るゝ如く悲しみたりと・餓死するもの年々少からざりき。（一〇、10）
失敗の上に失敗を重ねて。
一時は赤貧洗ふが如き有樣となれり・世人の注目するところとなる。（一〇、13）
財産・高尚なる品格・社會の規律・公共の物品・公德とは衆人の利益を考へて、其の行爲をつゝしむ德義をいふ・衆人群集の場處・四海兄弟の精神・五千萬の同胞。（一二、24）
私交上の關係・公共の事務。（一二、25）

見送る見かへる人ともに涙にくれました。それから小川村には近江聖人の良知の光がかゞやきました。

第二　語句の變化

前に注意した通り、「何々であります」又は「何々なり」と重ねて用ふるのがまづいから、語句の使ひ方はよく變化する事が必要である。

(1) **模範**。國語讀本卷十一、第五課瀨戸內海の一段。

本土の西、近く九州と相接せんとする所、下關海峽あり。四國の西には佐田岬長く突出で、九州にせまりて豐豫海峽をなす。淡路島の北方、本土と相望む所、明石海峽となり、四國に近き所、鳴門海峽となる。此の四海峽に包まれたる細長き內海を瀨戸內海といふ。

な心」といふやうな意味で、藤樹先生の歌へてあるから、外の人のには用ひぬがよい、又、大きくなつて學問すればだん〳〵分ります。

▲國家ニ關スルコト

代々の天皇の御位に即かせ給ふ時には必ず三種の神器を受けつぎ給ふ・いでや伊勢に至りて神宮を拜せん。（九、1）
靖國神社は維新前後國事にたふれだる人々を始め、其の後の諸戰役に戰死したる忠勇の士をまつる・天皇陛下の御製・木石の配合おもむき多し・遊就館・大村益次郎は維新の際軍事に功勞ありし人なり・行幸・行啓・誰かは義勇奉公の心を起さゞらん。（九、9）
天皇の御信任厚し・皇城を守護す。（九、18）
片時も君を忘れ奉ることなし・都の空のみしたはしき身に係る面目をほどこす。（九、23）

(1) **說明**。同じく海峽といふ語を用ひて、「あり」「をなす」「となり」「となる」と四種に變化して居る。
それから、此の四の海峽を一つにまとめてあるのが分るでせう。かやうに終りの方を括つてあるのを尾括式と言ひます。されば、文章の一段・一節にも構成法のある事が分る。

設問

(一)讀本中より尾括式の例をあげよ。
一課につき。一段につき。
(二)頭のみ括つてある文を何と稱すべきか。
頭括式
(三)讀本につきて頭括式の例を求めよ。

(2) **作例**

(イ)前出「第六學年の學科」は語句を變化して作れり。

今一度復習せよ。

(ロ)左の文は四年の一生徒の作である。語句の變化上、まづい所を直してみよ。

學校の記念日

僕たちの生れた日をたんじやう日といつて、家中でお祝をします。日本の國の開けた日を紀元節といつて、國中でお祝をします。又、學校創立の日を記念日といつて、おいはひの式をします。(後略)

第三　短文の練習

(1)設問。讀本中にある左の語を用ひて短文を綴れ。——語は皆六年前期中に學びたる讀本中にあるは諸子の知れる所であらう。

(イ)平然　(ロ)一散　(ハ)絶えず　(ニ)イハンヤ　(ホ)ムシ
(ヘ)勇ましさよ　(ト)空談にあらざらんとす　(チ)忽ち　(リ)盡くる所を知らず。

(2)作例。左に六年の生徒が作りたる例を示す。

(イ)火事だ〳〵と外の人のさわぐのに、彼のみは平然として支度をなす。あゝ、彼は大膽なり。

(ロ)スタートに立つた五六人はごうぜん一發の銃聲と共に一散にかけ出しぬ。

(ハ)都會には絶えず文明の進歩あり。

もう〳〵として絶えず降る梅雨のさびしさ。

(ニ)貧兒にても勉強して大いに天下に名を著はせしも

(イ)前出＝上の文を直した例(六年生)(1)の「します」の「ます」をとり「又」を入れ、(2)の「します」を括りづり、「すると同じやうに」と入れ、(3)を「式がありますと」と直せり。此の直し方はどうでせうか。

●短文につきて一語一句といへども、正しくりつぼに出來ざれば、全文がりつぼに出來ません。であるから、文を作る時はいふまでもなく、常に讀方の時間に學んだ語をがてんの行くまでよく覺えこみ、なほ、其の語を使つて他の文を綴る練習をつまなければなりません。綴方は幾度も幾度も數多く作つてみなければ、決して上手にはなれません。

●語句の意味を十分覺えこまなければ、ひよつとして左

御聖徳山よりも高く御仁愛海よりも深し●大御心の拜察せらるゝ●明治の聖世●我等臣民も亦祖先の遺風に從ひ、一致協同して此の國家を護らざるべからず●信賴し給ふ●拜讀。(一二、1)

奮勵努力●旗艦●歷代神靈の加護。(一二、2)

世界强國の國民たる名譽を負ふものは國民としても之に相應する品格を備へざるべからず●他國人の注意を引く●國民の度量●其の心の奥ゆかしきを感ぜずや。(一二、24)

自治の精神●國運の發展を期す●誠意の精神は實に自治制の根本にして、又其の生命なり●選擧●經費●威力を以て强制す●公平無私●圓滿なる發達は得て望むべからず。(一二、25)

安危。(一二、26)

國民皆兵●報國盡忠の道にいそしむ。(一二、27)

◉(二)歷史

▲天皇

笠置の山の行在所●君の御供●供御●いこはせ給ふ●やみの天地●また本の御代に返すは誰が任ぞ。(一〇、24)

一天萬乘の君●主上●御供仕うまつれる鐵石の武士もよ

ろひの袖をしぼらざるはなかりき●せめても此の所存を上聞に達せばやと●天顔殊に麗はしく笑ませ給ひぬ●臨幸。（一一、4）
我の孔明あるはあたかも魚の水あるが如し●願くは再びいふことなかれ。（一一、25）
萬世一系動きなし●我が皇室の大みいつ。（一一、28）
萬機の政●祖宗の治に居て亂を忘れず●誰か聖德の山よりも高く御仁愛の海よりも深きを仰ぎ奉らざらん。（一二、1）
天皇陛下の御稜威の致すところにして固より人傑の能くすべきにあらず●茲は汝等の忠烈に依り祖宗の神靈に對ふるを得ぶ。（一二、2）
輔弼●統治●親裁●聖旨●上奏といひ、建議といひ、請願といひ、其の手續に於て各相異なりといへども、要は下情上達の道を開かせ給ふ聖慮に外ならず。（一二、26）
大元帥●勅諭●股肱と賴む●王事に勤む●服膺●大御言●海行かば水づくかばね、山行かば草蒸すかばね大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ。（一二、27）

▲人物

一條天皇の頃には才學すぐれたる宮女多かりき●紫式部は才學すぐれながら、少しも高ぶりたる風なく、常に一と云ふ文字をだに知らぬ顏にすごしたりといふ●伯樂天の詩に「香爐峯の雪はすだれをかゝげて見る」と云ふ句あり。（一、5）

のあり。いはんや我等幸福なるものにおいてをや。
(ホ)病に死するよりは、むしろ御國の爲彈丸にて死するに如かず。
(ヘ)早朝より兵營にらつばの音、あゝあのしらべの勇ましさよ。
正行が戰ひぶりの勇ましさよ。
(ト)飛行機の交通しげく、後には此によりて空中の交通をなすやも知れず。これ決して座上の空談にあらざらんとす。
(チ)忽ち驚く雷の音、天には墨の如き黑雲むら〳〵と起る。
(リ)雲と浪と相接せんとするところ、目の及ぶ限り直線を引く太平洋の水の量は其の盡くるところを知らず。

のやうな誤りをする事がある。
例「父母の恩の深く大なること形容名狀すべからず」。此は優等な生徒の作つた誤りであります。どうして誤りか分りませう。

第四　文の構成法の二

乙　頭括式（トウクワツシキ）

(1)**模範**。國語讀本卷十一、第十九課瀑布。
(2)**說明**。第一段―瀑布のながめをまとめて書いてある。第二段―日光山の瀑布。第三段―那智瀧。第四段―布引瀧。第五段―養老瀧。第六段―ナイヤガラの瀧。終りに括りがない。
(3)**作例**。（讀本中になき文を示す）

梅

雪も未だ消えず、霜もなほ降れるにかゝはらず、春にさきがけて咲き出で、芳香を放つものは梅なり。故に梅は古より節操（セツサウ）の正しき君子などに喩（タト）へられて、人に愛せらる。菅公（クワンコウ）の如きも大に之を愛せられしは、人

●消え　ヤ行ノハタラキ。ハ行ナドハアヤマルナ。
●節操　ミサヲ。
●菅公　菅原道眞公。

のよく知れる所なり。

梅花には白・紅種々ありて、いづれも美麗なれども、其の最も賞すべきは、薫香の馥郁たるにあり。

其の實は鹽漬として食用に供し、幹は伐りて種々の器具を作る。我が國にて梅花の名所は、大和の月瀬・武藏の杉田等なり。

設問

左の題にて綴れ。

櫻。菊。

第五　叙事文

(1)**模範**。前に示した、「人の身體」「瀬戸内海」「藤樹先生と召使の別」

(2)**説明**。物事のありさまが目の前に見えるやうに書きあらはせ。左に二三の例を示す。

(3)**作例**。

甲、短文

夏の月（萬朝報。時文小品）

夏の月は白く碧空に懸つてゐる。橋番の家を覗くと、爺さん戸を開けたまゝぐつすり寝込でゐる。禿頭が月の光に青く光る。舟はあるが人はゐない。魚が一尾はねて白い波紋を作つた。水の月が伸びたり縮んだりして居る。

設問。左の題にて作れ。

雨後。秋の月。

▲戦争

流れる血に紅の波がたゞよふ。勇壮・戦場・力のこもつた號令。吾先にと漕いで行く。小山の様な白波が高くくだけて、夕立のやうに降散る。破裂・今にも沈むかと

志士仁人は生を求めて仁を害することなし、身を殺して仁をなすことあり。（一一、4）

白髪の一老人・無頼の少年等口々に罵りて止まず・汝長大にして劍をおぶといへども、心甚だ弱し・若し勇氣あらば我を殺せ・殺す能はずば我が胯の下をくゞれ・大業を成す・良や老人の無體をとがめず、信や少年の笑罵に怒らず、其の初め小恥にしのびしは後大功を立つるに至りし所以なり。（一〇、7）

面におびたゞしきしわたゝめり・悲しきは老・の白髪なり・一座皆よろひの袖をしぼらざるはなし。（一〇、15）

臣下として一天萬乗の君を遠國に流し來ること無道の極みなり・簒固の武士・風聞あり。（一一、4）

正儀に仕へん・六郎の形見・本意を遂ぐ・月日は流るゝ水の如し・具足一領。（一一、10）

策勢非凡にして、丹青の妙いふべからず。（一一、18）

首相・死力を盡し、忠節を致すべし・言々皆忠君の至情より發す・出師の表を見て泣かざるものは人に非ず・機に臨み變に應じて、智謀百出せり・天下の奇才なり。（一一、25）

---

(1)**模範**。前に示した、「人の身體」「瀬戸内海」「藤樹先生と召使の別」

(2)**説明**。物事のありさま、樣子などをありのまゝに書きあらはすは必要な事です。見聞した事のありさまをたくみに書きあらはす文です。

(3)**作例**。

甲、短文

夏の月（萬朝報。時文小品）

夏の月は白く碧空に懸つてゐる。橋番の家を覗くと、爺さん戸を開けたまゝぐつすり寝込でゐる。禿頭が月の光に青く光る。舟はあるが人はゐない。魚が一尾はねて白い波紋を作つた。水の月が伸びたり縮んだりして居る。

設問。左の題にて作れ。

雨後。秋の月。

薫香●●ヨイニホヒ。
馥郁●●フンヨクニホフサマ。
伐―代●●カヘリ。
具―具●●カヒ。
叙事文●●ノベカヘル。

びやゝする。（一〇、18）
悲鳴の聲● 荒浪に打返さるゝ船の頭を立直し〳〵死力を盡して漕進む● 岩にも當てず波にもまかせず、岩と波との間にボートをあやつりゐたるは人間業とは見えず● 將卒と共に戰場をかけめぐつて勇士に軍功を立てさせるものは馬である。（一〇、23）
軍艦鹿島香取は何れも上古の武神をまつれる神宮の名なり● 雲霧を利用し雨雪を物ともせず風の如く急進する勇壯なる有樣もおもひ見るべく、又優にやさしき武人の風流もしのばる● 四面皆海なる我が帝國は國家防禦の上より云ふも商業保護の上より云ふも常に强大なる海軍を有せざるべからず。（一一、8）
天下麻の如く亂る。（一一、25）
進軍● 應戰● 勝敗の數既に定まる● 包圍● 風號び海怒りて波浪山の如くなれども熟練なる我が砲手は物ともせず、打出す砲彈よく命中して、敵艦續々火災を起し火燄海をおほふ● 克く勝を制す● 世界史上空前の大海戰● 皇國の興廢此の一戰にあり、各員一層奮勵努力せよ。（一二、2）

涼味　（萬朝報に倣ふ）

日比谷公園の眞晝、巷の暑さを他所にして、池の噴水の飛沫を顏に浴びながら、綠蔭の四阿にスヤ〳〵と、背の赤坊と一しよに眠つてゐる子守があつた。

設問。

涼味　（自分の見聞した事にて作れ）　浴後。

乙　やゝ長き文

日光　（文部省舊讀本による）

我が國に名勝の地甚だ多けれども、自然の美と人工の美とをかねたること日光の如きはあらず。

日光の山は峯高く谷深く樹木繁茂して、その風景すでに尋常ならざるに、大谷川の清流その間を流れ、瀑布所々にかかり、東照宮その他の樓閣巍蒼たる樹間に隱見せるを以て、その風景の絕佳なること推して知るべし。

されば遊覽の客年中たゆることなく、夏の暑き時、秋の紅葉の頃には來り遊ぶもの殊に多し。

東照宮は德川家康をまつれる社にして、家康の孫家光が天下の富をつくして造りたるものなり。社殿樓門いづれも善をつくし美をつくせり。そのうち最も名高きは陽明門にして、世に日暮門といふもの是なり。

大谷川は中禪寺湖より流れ出で、絕壁より直下して有名なる華嚴瀧となり、つひに鬼怒川に合して、利根川に注ぐ。

中禪寺湖は周圍およそ六里、水すみわたりて湖面あたかも鏡の如く、風光甚だ佳なり。（此の文は記事文とする人もあり。）

設問。

飛沫● シブキ　トヨシ。
綠蔭● ミドリノカゲ
文の構成を考へよ。
高く〳〵深く● 對句
尋常ならず● アタリマヘデナイ。
鬱蒼● 水ノシゲツタアリサマ。
隱見● ミエタリカクレタリ。
絕佳● スグレテケシキノヨイコト
紅葉● モミヂ。
弱をつくし美をつくす● 此ノ上モナクリツパデ、キレイ。
絕壁● キリタツタガケ。
風光● ケシキ。ノコト

(三) 地理

▲名所舊蹟

日本一の高山は臺灣の新高山なり● 高士山は四時雪をいただきて潔く、其の形白扇を倒にかけたるが如く美し● 世界一の名山とも稱すべし● 近江の琵琶湖は周圍凡そ六十里● 山にさへぎら

名所舊蹟中、任意（ニンイ）の題を選（エラ）みて綴れ。

第六　構成を變化（ヘンカ）する法

(1)**說明**。文章のくみたてをかへて、別しくみに作り直す法で、長文を短文に、短文を長文にしたりなどするに都合がよい。

(2)**作例**。

兒島高德。

讀本卷十一、第四課の文の構成（本につき見よ）を左の如く變化することも出來る。

變化の一例。（此の外にもできる）

『志士・仁人は生を求めて仁を害することなし。身を殺して仁を成すことあり』。とかや、義を見てせざるは勇無きなり。いでや臨幸の路次に參り會ひ、君をうばひ奉らん。」とて、義兵を擧げしは、備後の人兒島高德なり。

元弘二年三月、後醍醐天皇隱岐へ遷されたまふ途中、高德は舟坂山にかくれて、今かくと待ち奉れども、他の途を通りたまひければ、さらばと千山萬岳の險岨を越えて、美作の杉坂に着きたるに、主上はや院庄に入らせたまふと聞き、衆皆散りぐになれり。

さても或日の朝、院庄の行在所の櫻樹に、墨の香高く、

天、勾踐を空しうするなかれ。

時、范蠡無きにしもあらず、

と大文字に書きつけある詩の句を、警固の武士ども見つけたれども、分りかねて上聞に達したるに、主上はた〳〵笑ませたまひぬ。

●讀本卷十一●第四課の●構成はこの通りである。
●第一段＝高時、天皇を流し奉る。
●第二段＝高德「志士・仁人は……」といつて義兵をあぐ。
●第三段＝志を得ず。
●第四段＝櫻樹に詩を題す。
●第五段＝詩の故事。
●構成變化
一、高德の語を以て始む。
二、次に、遷行の途中うばひ奉らんとしたるに、志を得ざりし事をまとめて。
三、次に、詩の事。
四、それから、終りに、此の詩は高德の書きたる由。
●原詩
天莫空勾踐時
非無范蠡

●任意　ジブンノキニアツタ。
●變化する　カヘル。

れ國にべだてられて、其の全景を見ること能はず。日本一の古き建物の今にのこれるは大和の法隆寺なり。昔ながらの形を存せり。おそらくは木造建築物中世界最古のものなるべし。奈良の大佛。（一〇、1）

江戸城及び日光東照宮等の建築に用ひたる銅は大抵足尾銅山より産出したるものなりといふ。（一〇、17）

繁榮旅館。（一〇、20）

興福寺の五重塔は猿澤池の北に高くそびゆ。建立。境内。規模極めて大なり。奈良師範學校の門内なる八重櫻一株は今も尚古の名殘をとゞむ。帝國博物館。老樹路をはさみて並倚ほ暗し。（一〇、26）

正倉院には多く古代の寶器を藏す。我が國の古美術はこゝに其の粹を集めたりと云ふべし。法隆寺よりは紅葉に名高き龍田川も程遠からず。老樹繁茂して翠綠したるが如し。爪先上りに行く。結構頗る大に眺望甚だ美なり。なだらかなる堂。御陵。畝傍山の東南なる橿原神宮にまうづるもの誰かは其のかみをおもひ出でゝ皇室の御威德を仰がざらん。大和は久しき間皇都のありし地にして昔ながらの山河、一木一草盡く上古を髣髴ぜざるはなし。名所舊蹟をあまねく尋ねんには幾月の巡遊も尚足らざる感あるべし。（一〇、27）

▲都會

九重の帝都。花の都。皇都。京都。舊都。繁華。街燈。街の如く天明に到るも尚消え

ず・邸宅・官衙・郵便電信局・裁判所・奈良市街の四は昔の都の跡にして、今はおほむね田畠となれり。

（一〇、26）

奈良には興福寺をはじめ多くの堂塔ありて、人をしてそゞろに佛敎の盛なりし奈良時代を思はしむ。

（一〇、27）

湖水の如きにはにぎやかなる市街あり・開け行く明治の御代と共に益さかえて。（九、12）

河に架したる橋は壯大にして市の美觀を添ふ・擬寶・首府・人口年々著しく增加す・巴里と同數に至るも亦甚だ遠からざるべし・車馬街上に滿ちて、往來頗る困難なり・壯麗・端麗比なし・市區井然・豆腐の設備皆具れり・公園・廣小路・テームス河岸の國會議事堂は第一に觀客の目を引く建築物なり・博物館。（一二、16）

▲交通產物

花鳥等の美しき模樣を織出せる花莚は我が國輸出品の一なり・花莚の織方を發明したるは岡山縣の磯崎眠龜と云ふ人なり・續々注文を受け販路次第にひらく。

（一〇、3）

足尾町は鑛業の盛大に赴くと共に次第に發達せり・數個の大坑道あり。

（一〇、17）

アッシ織とはおひようと云ふ木の皮を細く裂きて織りたるものなり。

（一〇、22）

交通・運輸の便を與ふ・誰か人智の進歩の大なるに驚かざらん・ひと〳〵に速力を競ふ世とはなれり・小歌交り

此は、高德無念やみがたく、せめては忠義の心なりとも上聞に達せばやと、夜前御庭にしのび入り、會稽山の故事をひきて、御心を安んじ奉らんとしたるなりき。

設問。 左の文の構成を變化して、短く綴れ。

第七　叙情文

(1) 模範。 讀本中「我は海の子」「出征兵士」の如き韻文はあれど、普通文にはなし。されど自分の感じた事を言ひあらはす事のけいこをして置くがよい。

(2) 說明。 自分の感じた事をを言ひあらはす文で、他の人にもしみじみ感じさせるやうに書くべきである。であるから、叙情文には多く美しき語を使ふ。

●注意　始めに何を書くか。

●叙情文　情は心の感じ。自分の感じた事をのべる文章。

(3) 作例。

なき妹（芦田惠之助氏作）

あゝ、あの赤い鼻緒の下駄、見るたびに胸がふさがるやうだ。あれをはいてちよこ〳〵あるいた妹の姿が今も目に見えるやうである。

忘れもせぬ五月十五日の朝妹は暖い床の中でかへらぬ旅に上つた。しかしその顔はたゞ眠つてゐるとしか見えなかつた。「武ちやん〳〵」。と呼んでも、たゞ眠つてゐるばかり、思ふさへ涙の種である。

葬送の日となつた。どうしてもこれを冷たい土にうづめたくはない。我は棺にすがつて泣いた。あゝ、あの赤い鼻緒の下駄、妹はどうしてゐるだらう。

設問。 左の題にて綴れ。

●構成　なくなつた妹の形見の下駄を見て、なくなつた時の事がまざまざと目に見えるやうに思ひ出した事をのべたのである。●赤い鼻緒の下駄●は此の文の見つけ所である。

に巡船頭のさをさし行く乘合舟ののどけさよ●運用自在●汽車●汽船の進歩は世界諸國をして目に益々接近せしむ●近年は空中飛行機の發明諸國に起れり●人智の進歩は際限なしと。

（一一、7）

綿花紡績●精巧なるレースの流れ心見るが如し。

（一一、21）

棒太は鰊と鱒との漁利殊に多し●主産地●牧穫●石炭皆各所にありて無盡藏なり。

（一一、24）

大小の船舶此の川を上下して、運輸の便すこぶる多し。

（九、6）

昔の旅行には色々難儀なことがあった●今は僅かの日數で女子供でも安樂に旅行が出來る。

（九、11）

貿易●世界を相手の商業●有無相通ず●需要供給●正直は最善なる商略なり。

（一二、14）

▲氣象

山おろしの風は身にしみて寒い●朱枯の風●霜にやけて赤くなつた杉垣の中には寒菊が今を盛りと咲いてゐる●二三羽のあひるが岸の霜柱をふみくだきながら、ゑをあさつてゐる。

（一〇、9）

扇を使へば風起り、むちをふるへば音を發す●空氣は少しにてもすきまあるところには必ず存在せずと云ふことなし。（九、19）

五風十雨●春の雨はしめやかに降る●そよ〳〵と吹く春風には我が身も蝶の樣に飛ち立たくなる●梅の實の熟する頃降り續く五月風●一

亡友を思ふ。

櫻

花の中にて櫻ほど麗しきものはあらじ。梅は清香馥郁たれど、その美は櫻に若かず。牡丹は濃艶に過ぎて、その氣品の高きこと櫻に及ばざるが如し。僅かに咲き初めたる櫻花の上に、うららかなる朝日の輝きたる、咲きも殘らず散りも初めぬ枝の間におぼろに勾ふ春の月の懸りたるなどは、えも言はぬ趣あり。更に、その散りぎはの潔きに至つては花々しき武士の最期にも比すべし。されば我が國人の之を賞翫するも亦偶然にあらざるなり。

設問。 左の題を叙情文にて作れ。

注意●●同じ題でも、其のありさまを書けば叙事文となり、其につきて感じたる事をのふれば叙情文となる。これを示すために櫻の叙情文をあぐ。

潰滅●コツテリトウシヌクイ。

えも言はぬ●言フニ言ハレヌ。

偶然にあらず●ユエナキニアラズ。

松。菊。

第八　叙事文と叙情文とのまざり

（1）**模範。** 讀本卷十一、第一課吉野山・卷十二、第一課大皇陛下の御製・同第七課鳥居勝商（叙事文なれども終り「古今勇士の意氣……」とあるは叙情なり。）等。

（2）**作例。**

英雄的行動（萬朝報より）　諸井泰造氏

嘗て大阪の福島紡績所が燒けた時、不意の騷ぎで、女工が多勢無殘な死を遂げた。其の夜寄宿舍の三階に寢てゐた姉妹連の女工がある。二人は老母が病の爲其の看護を弟に托し、遙々播磨から上阪し此の會社に働いて看病

注意●●此のまざり文の中で、叙事の方を主にするものと、叙情の方を主にするものとあり。

無殘●ムゴタラシイ。

托し●マカセテ。

上阪●大阪ニノボル。

東京ノ方カラ大阪ニ行クトキハ下阪トイフ。

發●ニフヒ。

猛火●ヒドイ火。

天にはかにかき曇る●恐ろしいのは二百十日頃の大あらしである●冬木立に吹きすさむ木枯の風●身を切る様な寒さ。（九、20）

天氣豫報●暴風雨警報●日々の天氣は我等の生活に大なる關係あり●氣象臺●測候所●觀測●報告●揭示●天氣如何を豫知する信號●航海中の船。（一二、4）

▲神社佛閣

敬神尊祖の美風●皇太神宮●三種の神器●春日神社の燈籠は其の數二千に近く、毎年節分の夜には盛く之に點火すと云ふ●神廐の三々五々友を呼び人に近づき來りて、食を求むるも愛らし●東大寺はたゞに大佛の大きさの驚くべきのみならず、大佛殿の高さ十五丈、東四長さ二十九丈、眞に世界第一の木造建築物とす。（一〇、26）

きよらかなる堂●御陵●畝傍山の東南なる橿原神宮にまうづ。（一〇、27）

吉野宮に參拜す●墓をとぶらふ●行宮の跡。（一一、1）

建國以來三千年。（一一、23）

橋を渡りて神苑に入る●老木坂をまじへて、高く天をつく●神々し●口すゝぎ手洗ひ●玉垣●御垣●かつを木●千木。（八、2）

木殿●青銅の鳥居。（九、9）

金銀の光、丹青の色、目もまばゆきばかりなり●建築の善美を盡す。（九、9）

五重塔高く其の北にそびゆ●昔は境内方四町●燈籠左

の費を儲けてゐたのである。所が其夜の火は殊の外の急勢で、二人が眠を覺ました頃には既に二階は一面の猛火で最う何うする事も出來ず、可憐や姉妹の運命も方に風前の燈火となつた。すると姉は忽ち一計を案じ、二人の帶を繋合はせ、其の一端を窓の欄干に結付け、「さあお春此れに傳うて早くお降り」「否私より姉樣お先に」と此處に讓合つてゐる間に早三階も火焰の裡に包まれ始めた。其途端かくと見た姉は財布を妹に渡し、「孝行しておくれよ」と言樣窓から下へ飛んだ。殘つた妹は止むを得ず「姉樣すみません」と下を拜し、其帶に傳うて難なく降りた。すると死んでしまつたと思つた姉は人々が豫め積重ねてくれてあつた濡蒲團の爲に助かつて、氣絶は

●風前の燈火 カゼノマヘノトモシビガキエヤスイヤウニ、イマニモイノチガアブナイ。
●一計を案じ ヒトツノハカリゴトヲカンガヘ。
●此處 讀本ニハナイガ、物語ナドデヨクツヾカフ字ナレバオボエオクベシ。
●途端 ソノヒヤウシ。
●財布 オカチイレ。
●看病ノニフヒアルカラ、大ジナコトガリカル。
●孝行しておくれ イマハノキハノミ

したが怪我は無かつた。（以上叙事）

嗚呼母の爲妹の爲我身を殺して願みざる眞心を神は知ろし召し給うたのであらう。（以上叙情）

第九　記事文

（1）**模範**。五年にて學びたる、讀本卷十、第九課冬景色第二十六課第二十七課大和巡り等。

（2）**說明**。見聞した物事をありのまゝに記す文にて、諸子が、運動會・旅行・螢狩などを記すは皆記事文である。

（3）**作例**。

甲　短　文

旅だより　（大島笠雨氏の文より）

●カイコトバ。心ガケノホドガヲカル。
●拜し ヲガム。
●慕め マヘモツテ。
●嗚呼 サテサテト、カンシンシタトキニイフコトバ。
●願みず カマハヌ
●記事文 よむ人もほんとうに目聞する心もちになるやうに書け、此の文は種々な文體を示す。
●山麓 ヤマノフモト、トホルヒト。
●行人 トホルヒト。

三

黒髪山麓の街道、全身を百度に近き日光に暴しつゝ歩行致し居り候。餘りの暑さに、途上には行人全く絶え、樹には蟬も啼かず、路傍の草は生色さへこれなく候。（樹陰に汗を拭ひつゝ）（候ヲトツテミヨ）

四

今夜はこゝに露營するのだ。包圍攻撃してゐた蚊軍も、飯炊ぐ煙に俄に退却し始めた。月はぼんやり小暗き檜の木立の上から覗きこんでゐる。（蓬來山にて）

五

——

梢より墜つる冷露に眼覺め、ハンモックより飛び下り、外套と共に疊んで肩に投げかけ、温泉に塵埃を流さんと只今下山致し候。（武雄温泉にて）

路傍●ミチバタ。
生色●イキイキシタイロ。
蘇ル●ヨミガエル。
包圍攻撃●トリカコンデセメル。
蚊軍●カグントヨン。
デヨシ、カガアツマッテクルノテ、兵ヲイニタトヘタ。
退却●シリゾク。
冷露●ツメタイツユ。
塵埃●チリホコリ。

右に多し。●聳立。（一〇、26）

三輪山は老樹繁茂し翠綠したたるが如し。●爪先上りに行く。●社殿壯麗。（一〇、27）

——

▲山川海洋

海岸●海濱●四圍の風光麗しく、神氣自らさわやかなるを覺ゆ。（一〇、26）

八重櫻一株。●老樹路をはさむ。●甚尚小暗し。（一〇、26）

日本一の長流を信濃川となす。●日本一の大トンネルは中央線の笹子峠にあり。（一〇、1）

世界有數の大銅山なり。（一〇、17）

海面はさゞ波を立てゐる。●靜かに波を切つて進む。●白い水鳥が見える。●白波が高くだける。（一〇、18）

前面は海に臨み、後は山を負ふ。●旅館は山により、谷に臨みて、山水のながめをほしいまゝにするを得べし。（一〇、20）

奈良櫻の名殘をとゞむ。（一〇、26）

朝鮮海峽に集中す。●風號び浪怒りて、波浪山の如くなり。●明くれば二十八日、天よく晴れて、海は靜かなり。●數條の黒烟を見る。（一二、2）

七里が濱のいそ傳ひ。●由比の濱べを右に見て。（一二、6）

山頂鋸の齒の如し。●光景を呈す。（一二、11）

南北新領土。（一二、13）

埠頭●艀舟●要害地●集散地。（一二、15）

貿流●世界に冠たり。（一二、16）

旅行記の一節　（後藤宙外氏）

白ちやけた綠色の岩があると思へば、其隣りには薄赤い岩がある。屏風の如き崖が來るかと思ふと蠟燭の様な巖が待つてゐる。形が變り色が變り、錯雜して極まる處がない。其の間斷橋孤屋を以て點綴し、人をして懷古の情を催さしめる。

夏の月　（萬朝報時文小品より）

夏の月は白く碧空に懸つてゐる。橋番の家を覗くと爺さん戸を開けたまゝぐつすり寢込んでゐる。禿頭が月の光に青く光る。舟はあるが人はゐない。魚が一尾はねて白い波紋を作つた。水の月は伸びたり縮んだりする。

——

一節●ヒトフシ。
錯雜●イリクム。
間斷橋孤屋を以て點綴し●カケテ。
ニワタシタ橋、一ケンダチノソマツナ家ガ、アチラコチラニポツポツアル。

上り行く坂路の左右すべて櫻多し●眺望●湖目總べて花なり●谷をへだて、向うの山腹。（一一、1）

島かと見れば岬なり、岬かと見れば島なり　一島未だ去らざるに一島更に現る●島轉じ海廻る●海の靜かなることは鏡の如し●遠く近く黒烟の青空にたなびくを見る。（一一、5）

煙たなびく。（一一、6）

水の奇觀は瀑布に如くはなし●直下七十丈の水は絶壁に氷柱のすだれをかく●水烟深谷をおほひ●最も美觀を以て聞ゆ●琉は益靜かなり●眞に白布をさらせるが如し●萬斛のとゞろくが如し●水のしぶき枯木に氷結して、水晶の花を咲かす●奇觀庶に名狀すべからず。（一一、19）

乙、やゝ長き文

夕照（坪内博士）

靜なる秋の空、ちぎれ〳〵にたゞよひたりし浮雲いつしか西の方へ移りゆきて、日は漸く地平線に近づきぬ。風も吹き絶えたる夕がたの青空、しばらくは水のやうに澄みて、天地共に靜なり。

太陽の山の端に近づくにつれて、紅はいよ〳〵加はりまばゆかりし光輝はやう〳〵減じ、譬へば巨大なる酸漿の如く見ゆ。今や殘の光線をば悉く天の一方に放つて沒せんとす。

空は見る〳〵一面の紅となりぬ。周圍の雲までも一時は紅をあびせかけられたる如くになりて、或は淡く、或は濃く、薄紫となり、薔薇色となる。やがてたゞよへる

第一段●●　夕方のしづけさ
第二段●●　まさに四山に入らんとする時の夕照。
紅●アカイ
巨大●●オホキイ
第三段●●　日まさに入らとする時の雲

▲天體

晴れたる大空には無數の星かゞやけり●星によりて方角を見定む●あまつそら●天の川●あけぼの、そら●夕暮のそら●夕日うら〳〵がにまばゆき光り●そらにきらめく●群星。（九、14）

◉(四)風景

（語句ヲ變化セル所アリ）

▲春

霞の奥●見ゆる限りは櫻なり●全山花の雲につゝまる●湖目すべて花なり●花にねて花に目さむる春のよび●あづさ弓春の野山。（一一、1）

ねむるが如き春の山●靜かなる春の海●たなびく霞。（一一、5）

ちぎれ雲は、金銀・琥珀などの碎片のやうに輝きて飛び散り、群れる雲は、或は黄なる旗をひるがへしたるが如く、或はあかね色の袖を吹き靡かしたるが如し。その彩見るうちに變化して、紫となり鼠色となる。

日は既に沒しぬ。雲は五彩をすて、盡く薔薇色となり、名殘の光暫くは天の一方に輝く。

夕風涼しく吹き渡れば、浮べる雲の影いつしか消えて、次第〳〵に暮れそめ、星一つ二つ輝き出づる頃には大空鏡の如し。

設問。左の題にて作れ

日の出の景色

我が國の首府（國民新讀本。）

東京は我が政府のある所にして、實に大日本帝國の首

のありさま
淡くク
第四段●●●　日沒の雲の色。
五彩●●イロドリ　イロイロノウツクシイ色
第五段●●●　雲全くをさまるゝ夕暮の空。
山●海邊●野原●市街どこでもよし。
首府●●皇居ノアルミヤコ

九重の八重櫻●匂ふ都の八重櫻●花ばみ吉野。
（一一、26）

かをる梅が香●霞鳴かぬ里もなし●紅そめし桃の花●新緑の風に蔕波さわぐ池のおも●つばめの飛ぶに似たりとて、その名に負へるかきつばた。（八、11）

のどかなる春の日。
（八 17）

黄なる菜種に青き麥●眠る蝶々●雲雀は空に高く舞ふ●たもとすゞしく吹く春風。
（七、3）

波風のしづかなる春の海。
（一二、1）

柳●櫻をこきまぜて、春の錦は野も山も。（一二、20）

百花滿開。（一二、20）

春風渡る廣野。（九、4）

しめやかなる春の雨●のきの玉水の音●一雨毎に花をもよほす春の雨●花を散らす春の雨●花を散らさぬほどにふれよ春の雨●紅白花は開く煙雨の中●そよ〳〵と吹く春風●胡蝶とぶ春の野邊。（九、20）

色香も深き紅梅。（九、26）

東風吹きて梅の花香る●花咲く春。（九、23）

花笑ひ鳥歌ふ●花に宿れる蝶●花に眠る蝶●つばさもかろくまふ蝶。（九、4）

▲夏

垣根にからむ朝顔●にごりにしまぬ白蓮●夕暮にさく月見草。（八、11）

涼しき暮の田植うた●長き日の夏の夕暮●植ゑる手先に月かげ動く●草葉の末に光る夜露。（七、3）

海水浴●冷水浴●暑さをさくる夏の温泉●夏なほ涼し。
（一〇、20）

府なり。南は海に臨み東北には隅田川あり。市の廣さは東西三里にして、南北四里に餘れり。

皇居は市の中央なる高き所にあり。まはりは二重の壕をめぐらし、宮殿おごそかに松杉の間にそびゆ。諸官省・裁判所・兵營などは多く皇居の近傍にあり。

市中は商家軒をならべ、電車・馬車・人車・自働車の往來さながら織るが如し。その最もにぎはしき所を銀座通とす。電信・電話の線は蜘蛛の巢の如く、電燈・瓦期燈の光は夜を照らして晝の如し。

名所には、上野・淺草・向島あり。向島の櫻は名高きもので、花の時には人の出づること最もおびたゞし。淺草には觀世音堂ありて、その傍にはさまざまの見世物あり。上野は四時のながめ最もよき所にて、そこには博物館・動物園等あり。

●府なり　●臨み　●東北　●隅田川　●市の廣さ　●東西　●南北　●餘れり　●皇居　●中央　●高き所　●まはり　●壕　●宮殿　●おごそか　●松杉　●間　●諸官省　●裁判所　●兵營　●多く　●近傍　●市中　●商家　●軒　●往來　●織るが如し　●電車　●馬車　●人車　●自働車　●銀座通　●電信　●電話　●線　●蜘蛛　●巢　●電燈　●瓦期燈　●光　●晝　●名所　●淺草　●向島　●櫻　●名高きもの　●花の時　●出づること　●最も　●おびたゞし　●觀世音堂　●傍　●見世物　●上野　●四時　●ながめ　●最もよき所　●博物館　●動物園等

第十　文の構成法の三。

丙、尾括式

(1)**模範**、讀本卷十、第十九課勇ましき少女・第二十二課、あいぬの風俗・第二十三課、家畜・卷十一、第八課我が海軍等。（前出英雄的行動）

(2)**說明**。前の說明で既にわかるが、文章の終りを括るもの。

(3)**作例**。

●尾括式　●括り方に種々あり。●全文をまとめたるもの。●古人の歌・俳句・格言などにてくくるもの。●教訓にて括る等。

山滝皆絶。（一一、5）
さゝやかなる細谷川に夏の月くだけて、金をながす。（九、6）
降りつゞく五月雨。一天かきくもる夕立の空。（九、20）
翠緑したる林。（一〇、27）

▲秋

空すみわたる秋の日。たけ狩り。たごり行く秋の山路。（八、3）
秋のうねりにやどる玉。秋の七草。きゝやう。かるかや。をみなへし。君を千代、八千代と観ふ白菊。黄菊。紅葉。さびしき庭の秋草。（八、11）
石山寺の秋の月。落ちくる雁。（八、17）
龍田川の紅葉。（二〇、26）

柳（小學綴方教本より）

まだ肌寒い庭の面に、そよ〳〵と吹く春風のするがまゝにゆら〳〵と打ちなびきながらけぶつてゐる柳の絲のあいらしいことよ。をりしも、春の月がそのしだれ柳のあひだにかゝつてゐるさまはまた一段のおもむきがあつて、何とも云ひやうがない。この柳の云ひやうのないおもむきをかのさむい北風に氣高きを誇る梅の花と。あたゝかい霞の春にはなやかさを爭ふ櫻の花とにくらべて、いづれまさり劣りがあらうか。

古人の句に、

むつとしてかへれば門の柳かな。

といへるはよく柳の本性をいひあらはしたものである。

備後神邊城の戰（大町桂月氏著鬼吉川より）

天文十九年十月、平賀隆宗使を以て神邊城主杉原忠興に言はしめて曰く、「徒らに歳月を費し、士卒の命を損するは益なきことなり。請ふ、我が命を君の矢先にかけん。二矢を限りて、もし中ればわれ斃れん。中らずば城を我に致せ。」と忠興年既に老いたれど、弓の名人なれば、「それは面白し。」と直に承諾せり。十三日、兩將は一卒をも從へずして、城外の野に相會す。相距ること六十歩。隆宗は床几に腰かけ、扇をあげて、「いざ射れ。」といふ。忠興心得たりと、燕尾箭を番へ、ねらひ定めて、ひようと放つ。その矢隆宗の副刀を挾んで、甲の腹に中りぬ。されど、隆宗いつはりて大に笑ひて、「君老いて、さしもの名人も射力衰へしか。矢低うして屆かず。」と云ひければ、忠興まこと〳〵思ひて、高く射る。こたびは隆宗の胄の上を越して、

蘇色に實る秋の田。木の葉をちらす秋の山風。（九、20）
落葉散敷く秋のさびしき。（一二、20）

▲冬

黄に紅に林をかさつてゐた木の葉も四方の山々。山おろしの風は身にしみて寒い。古い銀杏の木が一本木枯に吹きさらされてゐる。中程の枝の上に烏が二羽止つて、少しも動かない。廣い田の面は切株ばかり。あぜの棒の木に雀がたくさん集つてゐて、時々群になつてはとび立つ。活々とした色。霜にやけて赤くなつた杉垣の中には寒菊が今を盛りと咲いてゐる。枝もたわむ程。二三羽のあひるが岸の霜柱をふみくだきながらしきり

にゐをあさつてゐる。ずとんと一發何を撃つたのだらう。（一〇、9）

冬暖に夏涼しき所。（一〇、20）

夜ふけて、のきばに雪降り積む。（七、3）

冬日河水悉く氷結するに至る。滿目の廣野雪に埋れて。（一二、17）

(五) 理科

▲動物

穗て魚類は啼き所を喜ぶ、鯨の肉は食用となり、油は機械油となり、ひげは細工物に使はれる。（一〇、3）

犬は夜を守らせる爲又はかりに使ふために飼ふ。農家にては牛を色々の勞働に使役す。維新前までは牛肉を食ふ人は至つて少かつたが、今では全國食ばぬ所がなくなつた。牛の體は何から何まで役に立つて不用な部分といふものは一つもない。將卒と共に戰場をかけめぐつて、勇士に軍功を立てさせるものは馬である。よく勞るべし。豚はどんなものでも食ふから飼ふのにたやすい。しかも其の成長が極めて早い。羊や山羊の毛は刈取つて毛織物の材料にする。雞卵や雞肉の養分の多いことは知らぬ人はない。（一〇、18）

蜜蜂は群をなして共同生活を營む。百花滿開の候には外役の蜂は朝より夕に至るまで營々として寸時も休まず。花少き季節に入りても食物に不足することなきは一に其の勞役の結果なり。蜜蜂の群集生活を營むを得

後の石に中れり。「よくく弓矢の冥利につきたる身なるかな。」と歎息しつゝ、二言の信を守りて、翌日いさぎよくも城を隆宗に明けわたし、身は出雲に落ち行きぬ。

我が國の武士の約束を重んじたること此の如し。

（日本少年より）

ホシが出た

ホシといふは牛の名、未だ角が松かさ位な時僕の家へ來たのだ。幼い弟と二人でホシと名付けた。物を與ふる時「禮」と呼ぶと、キクリと頭を下げる御行儀まで付けてあつた。今日弟の手紙がとどいた。「兄さんあのホシは賣られました。私は惜しかつたけれど、金が入るのだからうれしいよいよ家を出る時、格別悲しくもないのか、ピンとして出ましたが、これからどんな主人に飼はれるのでせう。」とあつた。

●弓矢の冥利につく　イクサノウンガツキル
●歎息　ナゲク
●倡　マコト
●尾蛞　線をひきたる所にて括る。
●注意　本文は短いことばで、こみ入つた事をあらはし、強い感じを起さす文である。かやうな文では語のよみ方も次の様にするがよい。
●未だ　マダ
●家　ウチ　●幼い　ヲサナイ
●今朝　ケサ

自分は今朝爲替を受取つた。

我が志願（中學校用作文教科書）

父は海軍大佐となりて、吳鎭守府に在り。兄は陸軍步兵大尉となりて、第一聯隊に勤む。我今この學校に入りしが、常に父と兄とに倣ひて、好軍人たらんと欲す。晴朗の朝、月明の夕、思うて父と兄とに至れば、勉强せざらんと欲すとも得べからざるなり。

第十一　文體を變ふる法

設問　卷十一、第二課蜜蜂を、本よりも短くして、尾括式にて綴れ。

(1) **說明**　話語體を文語體に、文語體を話語體に變ふる

●話語體　オハナシノ文體。
●文語體　文章體。

ることを示す。

(2) **作例。**

柳（第十に示した話語體の文を文語體に變ふ）

未だ肌寒き庭の面に、そよ吹く風のするにまかせて、ゆら〳〵と靡きつゝ、うっけぶれる柳の絲の愛らしさよ。

をりしも、春の月のその枝垂柳の間に懸れるさまは、又一入の趣ありて、喩へんかたなし。

この趣ふかき風情は、寒き北風に氣品の高きを誇る梅の花と、暖き霞の春に艶麗を爭ふ櫻の花とに比して、いかでか優劣あらんや、古人の句に、

むつとして歸へれば門の柳かな。

と云へしは、よく柳の本性を表はせるものなり

櫻（第七に示したる文語體の文を話語體に變ふ）

風情 ヤウス。

いかでか＝豈アニ としてもよし

優劣 マサリオトリ。

るは共同團結して勞働をいとはず、有力なる武器を備へて敵軍にあたり、團體のためには生命をもしまざるによる。一群の總數數萬に及ぶ。（一一、2）

動物は呼吸作用によりて、空氣中の酸素を吸ひ炭酸瓦斯を吐出す。（一二、5）

魚腹に孵らる。爪牙。燕は春來りて秋去り、雁は秋來りて春去る。期せずして相集まる。（一二、7）

蚯蚓は數年の後には地面に近き土をば全く上下にうち返すといふ。農夫の田を耕すに似たらずや。（一二、82）

▲植物

蕉。芭蕉の葉は廣くて大きい。熱國に生ず。葉の形には卵形と楕圓形が最も多い。錢の樣に丸く針の樣に細長い。鋸の葉の樣にギザ〳〵がある。單葉。複葉。葉脈。肉眼では見えない程である。葉の並に附く樣子にも種々ある。（一〇、2）

保安林。炭。薪。材木。森林の樹木は互に其の枝をまじへて、雨の一度に地上に落つるをとゞめ、又地上の水分の一時に蒸發するを防ぐ。みだりに樹木を切りあらす時は暴雨の時忽ち大水出づ。土砂の飛散を防ぐ。氣候を和ぐ。（一〇、3）

甘藷の名は地方によりて異なり。關東にては薩摩芋と云ひ、薩摩にては琉球芋と云ひ、琉球にては唐芋と云ふ。甘藷は井戸平左衞門と青木昆陽とが不作の年餓死する人の多きをあはれみ、之をすくはんとずる義心よ

花の中で、櫻ほどうつくしいものはあるまい。

梅はいかにもにほひがよいけれども、そのうつくしいことは櫻にはおよばない。

すぎて、品の高いことは、櫻にはおよばない。

その少し咲きそめた花の上に、うららかな朝日のさしたありさま、今を盛りと咲きみだれてゐる枝の間に、春の夜のおぼろ月が懸つてゐるなどは、どちらもいふにいはれぬ趣がある。

とりわけ、その散りぎはの潔いことは、花は櫻木人は武士の花々しい最期にもくらべられよう。

されば我が國人のこれをほめるのもわけのないことではない。

短句・短文の變化。

及ばざるが如し＝およばないやうである

短句・短文の變化に示した

り起りてひろめたり●貯蔵の方法。（一〇、10）
同化作用●枯死●植物は動物質の腐敗物を肥料として成長す。（一二、5）
わが國は氣候温和に地味肥え極めて耕種に適し、米麥の栽培は最も早く開けたり。古來瑞穗の國の名ある所以なり●わが國の米は品質優良にして、其の味最も美なり●農作物の栽培法の如きは漸法になづまず能く學理を應用せば一層其の收穫を增加することを得ん●農は人の職業中最も健全最も高貴にして、又最も有益なるものなり。（一二、12）

鑛物

我が國にて最も盛に銅を產出するは足尾●小坂●別子等なり●產出高すこぶる多し●新式の機械を用ひし以來大に人力を省くことを得たり●世界有數の大銅山●坑道●カンテラの光を便りに銅鑛を掘取ること晝夜止む時なし●選鑛場●製煉場。（一〇、17）
掘れども炭鑛限りなし。山をうがちて山を鑄る。（一二、13）
撫順は滿洲屈指の炭坑地なり。（一二、23）

▲生理●衞生

胸●腹●骨●筋肉●皮膚●肺●血●心臟●胃●腸●內臟●腦●目●耳●鼻●口●指●毛●爪●腦は精神の宿る處にして、全身を支配す●重要なる機官●聚劍家●水夫の手は太く、郵便配達夫●車夫の足は强し●身體の構造は極めて複雜な

(イ)今櫻の樹がたくさんあります。（……多し。）
(ロ)昔櫻の樹がたくさんありました。（……多かりき。）
(ハ)領地を受けざりき。（……受けませんでした。）
(ニ)何とて命を捨つるには及びませう。（どうして命を捨てるに及ぶべき。）
(ホ)風土が適してゐるばかりでない。（風土の適せるのみならず。）
(ヘ)笑ニモイロイロアリマス。（ホンタウニタノシク心ノ中カラデル笑ハヨイコトダガ、時ト場合トヲワキマヘズニタトヘバ葬式ノトキヤ、マジメナギシキノトキナドニワラフハヨロシクナイ。トリワケ人ヲキヅツケヤウトシテワラツタリ、又ハ人ノキゲンヲトルタメニ心ニモナイオセジワラヒヲスルナドハマコト

同第十一課。
同第十課。
第十一、第一課。阿第十課。
同第十二課。
同ジコトバ重ナルトキヤ、ナルベクマトメテ簡單ニスル方ガヨイ。文語ノ方トヨククラベテ見ヨ。

ニイヤシムベキコトデ、カヘッテ其ノ人ガラノイヤシイコトヲアラハスモノデアル。（笑ニ種々アリ。眞ニ樂シク心中ヨリ發スル笑ハモトヨリヨケレドモ、時ト場合トヲワキマヘズ、タトヘバ葬式ノ時、謹嚴ナルベキ儀式ノ時ナドニ笑フハ宜シカラズ。特ニ人ヲ傷ケントシ、又ハ他人ノ歡心ヲ買ハントシテヘツラヒ笑フハ、其ノ心事最モイヤシムベシ、却リテ其ノ人品ノ卑ムベキコトヲアラハスモノナリ。）

(ト)三十七八年戰役ノトキハゲシイイクサバデアリマシタ。（……激戰地ナリキ。）
(チ)土人は驚きて、新來の客を眺めて立てり。（……未だ見たことのない人をみつめて立つてゐた。）
(リ)決心のかたい勇氣にかんしんして、そのいひつけに

同前。
同、第十九課。
卷第十二、第十五課。

したがはなければならなかつた。（決心の堅固なる勇
氣に感じて、其の命令に服せざるを得ざりき。）
(ヌ)其の人は誰であつたか。老人も知らぬ、きゝても知ら
ぬ。（其の人は誰なりしか。老人は知らず、聽衆も亦知
らず。）
(ル)にんじやうをかいたり、ぎりにそむいてまでも、にふ
ひををしむのは、まことにいやしいことである。（人情
をかき義理に反しても費用を惜むは、實に卑しき事
なり。）
(ヲ)何をか自治の精神といふ。（自治の精神とはどんなこ
とをいひますか。）
八月三十一日　（綴り方文例）
今日は　皇太子殿下の御誕辰日だから、朝早く起きて

同、第二十課。
同、第二十二課。
同、第二十五課。
文語に變へよ。

遙拜した。此の日は又殿下の御附武官であつた橘中佐
の戰死記念日である。海軍の廣瀨・陸軍の橘共に我が軍
人の花といはれて居る。
長いと思つた夏休も過ぎて見れば短いものだ。又明日
から樂しい學校へ行つてなつかしい先生や親しい友達
と會へるかと思へばうれしい。晩の中にすべての用意
をして置いた。机の前の時間割は慰め顏に僕の包を見
て居るやうである。
設問。「長いと思つた夏休も過ぎて見れば早いもの
だ。」の文語は左の中でどれがよいか。
1. 長しと思ひし夏休も過ぎて見れば短し。
2. 長しと思ひし夏休も過ぐればさても短し。

遙拜した……遙拜せり。
長いと思つた……長かつたり。
いはれて居る……いはれて居るである。
稱せらる。……稱せらるである。
友達……友人。
會へる……會へるを得と思へばうれしい。
會へるかと思へば……會へるを得と思へばうれしい。又、會ふを思へばうれしい。
やうである……やうであるが如し。

物理・化學

綿密な設計圖・切斷面・大規模・蒸氣や電氣の力を利用すると、何千貫と云ふ大鐵鎚も一人の手で自由に運轉することが出來る・大根を切る樣に造作ない。（一一、13）
風力を利用す・機關車・多大の改良を加ふ・國運發展・大小幾多の軍艦は海上の浮城とも稱すべく、遠く四方に航行して、到る處に國光をかがやかせり・空中飛行機の發明。（一一、7）
故障・成功・汽車の運轉。（九、10）
火は空氣なければ燃えず。（九、19）
天氣圖。（一二、4）

(六)社會

▲人情・風俗

あいぬの男子は髭とひげと

り・强健。（一〇、21）
體溫を維持す・消化・配合料理・消滯・材料も料理法も成るべく適度に變化させて、毎日同じ獻立をくりかへさぬ樣に注意するがよい。（一一、16）
常に笑はんと欲せば衛生に注意し身體を健全にすべし・天性快濶なる人も身體の健全を害すれば意氣も亦おとろふ・笑は身心の良藥なり。（一一、12）
百歲の長命を保ちて、一生を座食に費すものあり・二三十歲の短命にして美名を萬世にとゞむるものあり・「よく勉め又よく遊ぶ」はよく時間を利用する所以なり。（一一、17）

▲物理・化學

綿密な設計圖・切斷面・大規

第十二　説明文

(1)**模範。**六年の讀本には多くある。

卷十二だけでも、第三課・第四課・第五課・第八課・第十一課・第十二課等其の外にも數課あり。

(2)**說明。**物事につきて、其はどういふものであるか、又は其のどうりなどを說明する文なり。

(3)**作例。**

教育勅語

明治二十三年十月二十日下賜セラレシ教育勅語ハ、實ニ國民ノ服膺シ奉ツルベキ寶典ナリ。

始ニ「皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」ト仰セラレテ、我ガ建國ノ由來ヲ示シ、國體ノ基礎大磐石ノ如キコトヲ明ニセラレ、ツギテ、我ガ國民ハ克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシ來レルコトヲ仰セラレ、此ノ固有ノ國體ノ精華ハ教育ノ淵源ニシテ、決シテ他國ヨリ傳來セルニアラザルコトヲ示サル。

ツギニ、國民ノ守ルベキ道ヲ一々教ヘタマヒ、天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉リ、祖先ノ遺風ヲ顯彰セヨト勵マサル。

終ニ、「之ヲ古今ニ通シテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」ト仰セラレ、皇祖皇宗ノ遺訓タル我ガ國ノ教ハ、世界ノ公道ナルコトヲ示サレ、「朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸厥ノ德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」ト、陛下御親ラモ我等臣民ト俱ニ此ノ道ヲ行ハセラルベキコトヲ宣ハセラル。申スモ畏キ極ミナラズヤ。

●●說明文、はどうりや、すじみちがはつきり分るやうに書くべし。故に、
1. 順序をよく立てよ。
2. あいまいな書き方をするな。
3. 形容などはなくともよいから、はつきりした語を用ひよ。
4. むだに長たらしき事を書くな。

●寶典　クツトイチシヘc。
●基礎　ドタキ。
●公道　ドコニモ通ズルオホヤケノケミチ。
●宣フ　オホセニナル。
●長キ極ミ　オソレオホイコトノウヘナイ。
●皇恩●感謝　陛ドノコオンアリガタイト フカク心ニトメル。
●御趣旨　オボシメシ。

を長くのばし、耳に金輪の輪をはめ、こしに小刀をさぐ●入墨をほどこす●つゝ袖●珍味として賞美す●ほつたて小屋●熊祭り●土人保護法。(一〇、22)

店員入用の廣告●知名の人●少しも生意氣の風がない●何を聞いても一一明白に答へる●證僞作法をわきまへる●注意深い●人が大ぜい込合つてゐる中で、少しも人に先んじようとはせず、靜に自分の順番を待つてゐました。(一〇、11)

女々しいふるまひ●言葉鋭くしかつた●それは餘りな御言葉です。何で命ををしみませう。(九、7)

昔の族行には色々雜僞のことがあつた●關所破。(九、11)

祭の當日はおびたゞしい見物人が朝早くから宮の境内へつめかけた。神主は神前で祝詞を上げた●もう收めて勝負には及びません。(九、24)

家が低くて小さい●田舍は大抵藁屋根ばかりである●朝鮮ではオンドルのために普通の家では冬でも夜具を用ひない●新髪の風●婦人は室内に引込んでゐて來客に會ふことも外出することも少い●衣打つきぬたの音。(一一、26)

(以下地理書にある大切な語句)

▲五年の地理書。

我が國の住民は概ね大和民族にして、其の數凡そ五千五百萬あり。上に萬世一系の天皇を戴き奉り、忠君愛國の心に富めり●奥羽地方は土地の廣き割合に住民少く、未だ開墾せられざる所多し●盛岡は縣廳の所在地

我等帝國臣民タルベキモノハ、日夜皇恩ノ大ナルコトヲ感謝シ、勅語ノ御趣旨ヲ奉ジテ、忠良ノ臣民タルコトヲ心ガケザルベカラズ。

設問。 左の題にて作れ。

戊申詔書

牛

（坪内博士）

牛・馬・羊・雞・犬・豚の六種は最も普通なる家畜なるが、そのうち廣く用ゐらるゝこと牛にまさるものはなし。

牛には、黑・あめ・ぶちなど毛色もいろ〳〵あり。いづれも頭に一對の角を具へ、頸太く眼大きく、瞳は一の字の狀をなし、齒は門齒あれど、下顎にのみありて、物をかみ切る用は爲さず。臼齒は大きくして、その面は凹凸甚

普通●アタリマヘ。　家畜●人家ニカフイキモノ。　狀●アリサマ。　下顎●シタアゴ。　凹凸●デコボコ。

しく、食物をすり碎くによろし。牛の蹄は馬のとは異にして、左右に分れたり。此の如きを偶蹄といふ。

牛は草食獸なり、其の歩む時にも休める時にも屢々口を動かす。蓋し牛の胃は四房に分れたり。最初食物を十分にかまずして第一房に嚥み下し、次に第二房に送りたるをば再び口中に吐き戻し、しづかにかみ碎くを例とす。かくするを反芻と名づく。ついで、第三房・第四房に移し、順次に消化す。

牛は歩むこと遲けれども、力は甚だ强く、能く數百貫の重荷をも運搬す。其の體は何れの部分も人間に有用なり。骨と角とは釦・櫛などに造り、毛は蒲團のうちに入れ、皮は靴・鞄に造り、血は砂糖をさらすに用ゐる。中にも肉と乳とは最良の滋養食品たり。

異●チガフ。　厦々●タビタビ。　前ノ語●前ノ語ヲ受ケテ、次ノ語ニウツルトキニ用フ。　蓋し●オモフニ。又、サテ。　房●ヘヤ。　例●イツモノシカタ。　順次●ダンダン。　消化●コナス。　運搬●ハコブ。　最良●イチバンヨイ。　滋養食品●ヤシナヒニナルタベモノ。

にして、馬市の盛に開かるゝ所なり。最も早く開けたる所なり。水陸の交通甚だ便利にして、商工業極めて盛なり。牛馬の飼養盛に行はる。

▲六年の地理書

沖繩は氣候甚だ暖にして、甘藷・甘蔗等の栽培盛に行はる。又一般に豚を飼養する風あり。臺灣には人口凡そ三百萬あり、概ね支那より移住せしもの、子孫にして、重に平野に住し、農商の業を營む。此の外古來數種の蕃人あり、概ね東部の山地に住し、今尙未開のまゝにて殺伐を好むもの少からず。近來內地人の移住するもの次第に增加す。北海道は古來アイヌ人の住する所にして、戶口も稀少なりしが、維新後大いに意を開拓に用ひたるを以て、內地より移住するもの次第に多く、今や人口百四十餘萬に及べり。樺太の住民凡そ二萬五千あり。其の大部分は內地よりの移住者なり。土人はアイヌ其の他二三の種族あれども、其の數極めて少し。滿州の住民は約十千六百萬あり。我が國人の在留するもの年年多きを加へ所々に日本風の市街を見るに至れり。

設問。 左の題にて作れ。

馬。

蝶と蛾（山縣五十雄氏）

春の日花に舞ふ蝶、夏の夜燈火を慕ひて飛び來る蛾、愛すべく憐むべきに似たれども、其の實は概ね人門に害を與ふる惡むべき動物なり。

唯蠶のみは、我々に美しき糸を供給するが故に益蟲と云はざるべからず。その他の蝶蛾類は、その幼蟲卽ち毛蟲時代に植物の枝・葉・根・幹・果實等を貪り食して、穀物・果實の收穫を減じ、樹木を枯死せしめ、甚だしき害を及ぼすものなり。何人も知る如く、兩者共に羽翼を有して、蝶は晝間に、蛾は夜間に四方に飛び廻り、卵を到る處に

供給●●モトメル人ニアタヘル。　貧り●●アクコトシラズ、タクサン　枯死●●カラス。　羽翼●●ハネ。　到る處に●●ドコニモ。　收穫●●トリイレ。　繁殖●●フエル。　租稅●●ゼイキン。　存在●●ナリタツテ井ルコト。　安寧●●アンタイ。ブジ。　繁榮●●サカエル。　徵收●●トリタテル。　現品●●ジツサイノシナモノ。　方法●●シカタ。　漸ク●●ダンダンニ。　獨リ●●タダ。

産み附けて繁殖するものなり。

設問。 左の題にて作れ。

蛙の發生。

租　稅

國家ガ其ノ存在ヲ保チ、國民ノ生命・財産ヲ保護シ、安寧・幸福ヲ進メ、繁榮ヲ圖ルニ要スル費ニ充テンガ爲ニ、國民ヨリ徵收スル財ヲ租稅ト云フ。

租稅ハ、古代ニ於テハ現品ヲ徵收シタリキ。サレド、此ノ如キ方法ハ時代ノ進ムニ從ヒ種々ノ不便ヲ生ズルヲ以テ、漸ク貨幣ヲ以テスルコトヽナレリ。此ハ、獨リ我ガ國ノミナラズ、各國共ニ同樣ノ歷史ヲ經タリ。

租稅ノ種類ハ多ケレドモ、大別シテ、國稅ト地方稅トノ

一トス。國稅ハ、國費ニアツル爲ニ國庫ニ收入スルモノニテ、其ノ重ナルモノハ、地租・所得稅・印紙稅・通行稅・鑛業稅・酒稅・醬油稅・砂糖稅・織物消費稅等トス。地方稅ハ、其ノ地方ヲ治ムル爲ニ課スルモノニテ、府・縣稅ト市・町・村稅等ノ區別アリ。

租稅ハ、忠良ナル國民トシテ、地方自治ノ臣民トシテ、果タスベキ重要ナル義務ナレバ、收入ノ調査ナドニ際シテハ、正確ニ迅速ニ申告シ、且、納稅期ニ後レヌヤウニセザルベカラズ。

設問。左の題にて作れ。

議員選擧。

雁

（讀本卷六、第四による）

國庫●大藏省ツカサドル。　自治●ジブンダチガチサメル。　課ス●ワリアテル。　重要●タイセツ。　區別●チガヒ。　義務●ツトメ。　納稅期●ソセイヲイヲキ。　收入●金ノトリタカ。　調査●シラベ。　文語ニ變ヘヨ●文語ニ變ヘヨ。

▲文明

畫をかく人、圖を引く人、寫眞をうつす人の苦心も亦一通りでない。一色の印刷ば一度刷ればよいが、色のたくさんまじつた美しい繪畫や地圖の樣なものは幾度も印刷を重ねなければならぬ。（一〇、6）

模樣の工夫は無限に多し。繪畫・模樣等を色どりするには色の調和を考へざるべからず。工藝美術・生活費。（一〇、14）

一つの仕事を大勢の人が手分をして別々の仕事をすることを分業と云ふ。人はその身體・才能などによつて、仕事に適不適がある。熟練・器具の改良や發明。（一一、3）

如何なる發明も一度や二度の不成功で氣をくじく樣で

燕ハ暖ニナルト、何處カラカ飛ンデ來テ、涼シクナルト、又何處カヘ飛ンデ行ク。雁ハ燕ノ歸ル時分ニ來テ、燕ノ來ル時分ニ歸ル。

モウ秋ニナツタカラ、雁ガオヒオヒ飛ンデ來ル。雁ハ何時デモ一シヨニナツテ、列ヲ作ツテ飛ブ。其ノ時ニハ一羽ノ雁ハ列ヲ離レテ少シ先ノ方ニ飛ンデ行ク。其ハ道案內ノ行ク方ヘツイテ行ク。又案內デアル。他ノ雁ハ道案內ノ行ク方ヘツイテ行ク。

トブ時ニハガア〳〵ト鳴合フ。其ハ合圖デアル。モシ列ニ離レルヤウナコトガアツテモ、其ノ合圖ヲ聞クト、スグ列ニ加ルノデアル。

雁ノ鳴ク聲ヲ聞クノハ、空ガ晴レテ、月ノ明ルイ晩ニ多イ。曇ツタ夜ヤ月ノナイ夜ハ道ニ迷フカラ、大抵月夜ニ飛ブノデアル。ヨク注意シタモノデハナイカ。

注意●此の文は三年生に分らすために、語をやさしく書いてあるから、上級生が文語になほす時にはよほど語をきりつめて、簡單にせる所あり。　道案內●道導キヤウダウ

は出來上るものではない、幾度も〳〵造り直して終に其の目的を達したり。（九、11）

旅客は皆汽車の便による。今のさびしさと昔のにぎはしさとをくらべ見れば世の轉變の如何に甚だしきに驚くならん。（九、12）

人智の進歩は際限なしと云ふべし。近年は空中飛行機の發明諸國に起れり。汽車汽船の進歩は世界諸國をして日に益々接近せしむ。（一一、7）

第十三　擬人法（ギジンホウ）

設問。 左の題にて作れ。

燕

(1) 説明。 人でないものを、人のつもりにして、自分の事をのべるやうに作る文。四年までの讀本には數課ある。

(2) 作例。

十錢銀貨の物語（殺り方文例に倣ふ）

僕は十錢銀貨である。今は正雄君のさいふの中に入つて居るが、これまでにはづゐぶん色々な所に行つた。僕は生野銀山の生れてである。故郷から大阪へ出て、みが

◉(七)俳句・和歌・漢詩類

（七、7）
●蕾町で目明きめくらに物をきゝ。

（八、2）
●氷へに民やすかれといのるな我がよをまもれ伊勢の大神。

（九、11）
●箱根八里は馬でも越すがこすにこされぬ大井川。

（九、22）
●東風吹かばにほひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな。

（九、20）
●紅白花開煙雨中。

（九、23）
●課長無驚時變改。一榮一落是春秋。

きをかけてもらひづつとハイカラになつて、多くの仲間と一しよに汽車で東京に來た。それから呉服屋・本屋・小間物屋・飲食店と方々へ行き、たくさんの人とも交際したが、僕はどこでも人に愛され、僕を見ていやな顔をする人は一人もない。けれども僕は働きもしないで僕たちを何とも思はず、つかんで女中などにくれる人は大嫌ひである。僕はこれでも帝國の寶だからね。

老人から子供、子供から大人と、廻り廻つて、とう〳〵正雄君のおとうさんの所に來た。おとうさんは正雄君がよく言ひつけをきくといふので、僕をごほうひにやられた。

正雄君は外のものよりも僕をかはいがつて、時々さいふの中をのぞいて見る。さいふの中には僕の外に一錢

●去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在此。捧持毎日拝餘香。（九、26）

●勤なればいとまもかしこし。鶯の宿はと問はゞいかゞ答へん。

●大江山いくのゝ道の遠ければまだふみもみず天の橋立。

●古の奈良の都の八重櫻けふ九重にほひぬるかな。（一〇、1）

●白扇倒懸東海天。（一〇、5）

●香爐峯の雪は簾をかゝげてみる。（一〇、24）

●さしてゆく笠置の山をいでしより天が下にはかくれがもなし。

●いかにせんたのむかげとて立よればなほ袖ぬらす松の下露。（一〇、26）

●天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも。（一〇、27）

●人はいさ心も知らず故里は花ぞ昔の香にほひける。

●來てみればこゝも櫻の峯つゞき吉野初瀬の花の中宿。（一一、1）

●吉野山かすみの奥はしらねども見ゆる限りはさくらなりけり。

●これは〳〵とばかり花の吉野山。

●花にねてよしや吉野の吉水のまくらのもとに石走る音。

●かへらじとかねて思へば梓弓なき數にいる名をぞとゞむる。

第十四

誤り易き漢字と假名遣（實際ニタメ）

甲　漢字

(1)間アヒダ　聞キク。　(2)島シマ　鳥トリ　烏カラス。

(3)第ダイ…一、…二。　弟オトウト。

(4)兩リヤウ・雨アメ。

(5)枚マイ・枝シ エダ。

(6)汽車キシヤ　ツクリニ氣ヲカクナ。

(7)他タ・池イケ。

(8)森モリ　林ハヤシ

(9)曇クモリ　雲クモ。

(10)全マツタシ　金カネ。

(11)氷コホリ

(12)昨ー日　作ツク。

(13)丸マル。　テンヲ右ニウツナ。

(14)士サムラヒ　土ツチ。

(15)王・主ヌシ。　玉タマ。

(16)爪ツメ　瓜ウリ。

(17)板イタ　阪サカ。

(18)住ス ム　住ス ム　柱ハシラ。

(19)桐キリ　銅アカガネ。

(20)墨スミ　黑クロ

(21)和ヤハラグ　私ワタクシ（和合ヲ私合トアヤマル人アリ）

(22)商アキナヒ　商ニアラズ。

(23)恩・思オモフ

(24)孝・考カウカンガフ

(25)類ルヒ　犬ヲカクナ。

(26)印・卵タマゴ

(27)藥クスリ　樂タノシ。

(28)精ー神　淸シキヨ　晴ハレ（淸天・晴神・淸神ナド）

(29)陛（天皇陛下トアヤマルモノアリ）

(30)働ハタラキ　動ウゴク。

(31)具・貝カヒ。

(32)飯メシ

(33)儉ー約　嶮ケハシ。

(34)飮ノム。

(35)畫エ　晝ヒルカク。

(36)待マツ　侍サムラヒ。

(37)連・運。

(38)傷キズ　腹ハラ　腸

(39)滅ホロブ

(40)管スゲ。

(41)改アラタム　攻セメ。

(42)亦マタ　赤アカ。

(43)舞マヒ　無ナシ。

(44)河カハ　何ナニ。

此處にあげたのは、ふだん六年生の綴り方を見て、よく誤る例をとつたのである。

此處にあげた外に、國語の時常によく注意して正しく覺えよ。

●歌書よりも軍書にかなし吉野山。（一一、4）
●天莫空勾践。時非無范蠡。（一一、17）
●一寸光陰不可輕。（一二、1）
●神代よりうけし寶をまもりにて治め來にけり日の本の國。
●うけつぎし國の柱の動きなく榮えゆく代をなほいのるかな。
●古の書みるたびに思ふがなおのが治むる國はいかにと。
●國民は一つ心にまもりけり遠つ御祖の神の敎を。
●敷ひたる劍の光いちじるく世にかゞやかせ我が軍人。
●國を思ふ道に二つはなかりけり軍のにはに立つもたゞぬも。

(45)警（イマシム）驚（オドロク）。(46)恐（オソル）怒（イカル）恕（ユルス。恕ハ本ニナシ、）(47)朱（アカシ）未（イマダ）末（スエ）。(48)與（アタフ）興（オコル）。(49)營（イトナム）螢（ホタル）榮（サカユ）。(50)容（カタチ）客。（他略ス）

乙　假名遣

(1)わ・は。＝語ノ始ガわノトキハ決シテはヲ書クベカラズ。
(2)へ＝ハ始ニアッテえトナルコトナシ
(3)居＝ゐた・ゐました等。ゐデアルいトアヤマルナ。（此ノ誤多シ）
(4)何々を＝トイフトキおヲ書クナ。（此モヨクアヤマル）
(5)ウ列（ウ・ク・ス・ツ・ヌ・フ・ム・ル・ユ・ウ）ノ下ニイノッタ字音ハ必ズキナリ。
(6)買うて・笑うて・使うて等ノうヲふト誤ルナ。（買ひて笑

私ナはたくし、腹ナわらトカクモノアリ。縁日チへん日トカクモノアリ。居る＝ハをるナリ。おるデハナイ。例スヰ水類。

●波風のしづかなる日も船人はかぢに心を許さぢらなん。（一二、6）
●しづやしづ賤のをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな。

ひて等ガ變ツタノデアルカラ）
(7)ヤ行ヲハ行ト誤リ易キモノ。
消え・見え・冷え・榮え・覺え・越え・肥え・絕え・殖え・燃え等ヲハ行（消へ・冷ふトイフヤウニ）ニアヤマルナ。
(8)イノ送リ假名ヲ用フルモノ。
老い・報い・酬い・悔い。
(9)ワ行ノ送リ假名ヲ用フルモノ。
植う・飢う・据う等
(0)家へ入るヲ家えトシ、買ひヲ買いトシ、行つた・乘つてノつヲヌカス如キ、普通ノコトヲ誤ル人マヽアリ。ヨク注意セヨ。

◉注　意

綴り方のかたや心得はまだ〳〵たくさんあるけれど

絕えハヤ行ノハタラキナレドモ、堪へハハ行ナリ。
考ひナドトアヤマルナ。植へ又ハ植えナド、アヤマルナ。

自分のよく出來る事はやつ

も、尋常科卒業の程度では、以上に示した事をよく覺えこめば十分であります。それから、國語讀本をよく覺ることは言ふまでもなく、修身・歴史・地理・理科などもよく覺え、なほ、平常見たり聞いたりする物事にもよく注意すべきであります。何でも自分の思ふ事、考へた事を書きあらはすのが綴り方であります。綴つて見たいと氣のりがするやうでなければよい文が出來ません。

第十五　雜（種々な文をまぜて示す）

紀行文の一節（萬朝報より）

早生徒歩旅行選手　石原雅二郎君

殆ど斷念してゐた長良の鵜漁を夕食も半ばに箸を棄て、十八樓から飛舟で行つて、やつと岐阜提燈のついた遊覽船に乘り移ることが出來た。繪にも書けない、文でも綴れない。寫眞では川の音が寫らぬ、文章には船が動かぬ。鵜が水を潛つて、青い水の底に黑く閃めく光景は、到底一度見ねば云へぬ。書けぬ。寫せぬ。（讀本卷十一、第二十課鵜飼とひきあはせて見よ）

各地の被害（二三新聞より）

明治四十四年六月十九日暴風雨

千葉縣

●成田方面　正午頃成田町の電鐵プラットホーム倒れ電車不通となる。君津郡小櫃小學校々舍倒れたるも生徒は無事。其の他被害少なからず。

神奈川縣

●各地の被害　出來事を簡單に報告する手本に示す。

●綴つて見たくてたまらないものです。綴り方もたまらぬやうに氣のりがしないやうではだめです。以上ざつと一通りの心得を示したが、なほ諸君の手本にしてよい種々な文を備かに示して置きます。構成や文の種類は前の事を考へれば分ります。

●秦野煙草全滅　煙草は目下六七寸の處にて、秦野附近は殆と全滅なり。但し、稻麥の被害は少し、●畏き御詫　葉山御用邸なる東宮妃殿下にはいたく御痛心あらせられ、殊に御用邸の外圍倒れたる際には「御用邸すらこの有樣なれば、他の慘害は如何あらんと」仰せありきと承るぞ畏こき。

四季折々の中（大和田建樹氏）

一　春の朝

鶯しきりに鳴くはうしろの藪なるべし。起き出づる頃は春の霜半きえて、日影はやく庭にあり、寢ごゝろのよき頃にもなれるかな。豆腐うる聲は今ぞ門を過ぐる。

二　秋近し。

月の色秋近し。氷賣る少女はあきなひのなきをかこち、蟲賣る翁はわが時なるを喜ぶ。夜更けて家に歸るに、按摩の笛きのふよりは身にしむこゝちす。

山田古嗣（原漢文）

古嗣幼ニシテ母ヲ喪フ。嘗テ書ヲ讀ミ「樹靜ナラント欲スレドモ風止マズ、子養ハント欲スレドモ親待タズ。」トイフニ至リ、流涕シテ卷帙ヲ濡セリト云フ。

日ヲ愛ム　（原漢文、貝原篤信先生）

人ノ學ヲ講ジ業ヲ勤ムルハ皆時日ノ力ヲ以テス、故ニ志士ハ日ノ短キヲ惜ム。嗚呼、此ノ日ハ再ビ得難ク、今年ハ重ネテ來ラズ。是ヲ以テ學者最モ時日ヲ惜ムベシ。豈時ヲ廢シ日ヲ曠シクスベケンヤ。

伊達政宗　（原漢文）

伊達政宗、名ハ梵天トイヒキ。生レテ甫メテ五歲、嘗

●全滅　タエテシマフ。
●目下　イマノトコロ。
●附近　チカマ。
●畏き御詫　オソレレオホセアリ。
●御痛心　ゴシンパイ。
●御害　ムゴタラシイ害。
●頃にもなれる　コロニナツタワイ。
●かこち　ナゲク。
●翁　オヂイサン。
●喪フ　シニワカレタ。
●流涕　ナミダヲナガス。
●卷帙ヲ濡ス　本ヲヌラス。
●時日　トキ。
●嗚呼　サテ、サテ。
●重ネテ來ラズ　イクドモコナイ。
●學者　コヽデハガクモンスル人。
●廢シ　ムダニスル。

テ佛時ニ遊ビ、不動ノ像ヲ見テ、近臣ニ指シ問ヒテ曰ク、「此ハ何者ゾ、何ゾ其ノ顔貌ノ猛キヤ。」對ヘテ曰ク、「不動明王ナリ。其ノ貌ハ猛シト雖モ其ノ心ハ則チ慈悲ニシテ衆ヲ濟フ。」梵天曰ク、「武將タルモノハ宜シク此ノ如クナルベシ。」ト。

職●シク ムダニス、スベケンヤ
顔貌 カホカタチ。
猛シ オソロシ。
近臣 ツイテルケライ。
悲慈 ナサケブカイ、
衆 オホクノヒト。

◉日用文の諸心得

▲(一)作り方

(1)用向の足りるやうにせよ。

(イ)報知文ならば、報知すべき要點。案内文ならば何で・いつ・どこに等、案内をうけた人が分らぬ事のないやうに。註文狀ならば、品物・數量・直段・代金等、註文をうけた人が其の手紙でさしつかへなく註文品を送ることが出來るやうに書け。

(ロ)先の相手によりて、其に相當した事を書け。たとへば、父母に手紙を出すときは、第一に自分の健康・成業など

下篇 日用文

國語讀本卷九から卷十二までにある日用文の順序によりて綴り方を示し、其の外日用普通の分を補ふことにした。但しひじやうに長い文は、省いたから、讀本について練習せよ。

(電信文・願・届書類は省く。)

第一 旅行先の父に送る手紙

(讀本卷九、第十三課の題。但し、文は全く別にかへたり。)

拜啓。十二日附御差出しの御手紙昨夜到着仕候。何の御障もなく入らせられ候由、一同安心致居候。家内一同無事、弟は御出立の頃腸カタルに候ひしが、最早全快致し前よりも一層太り候。祖母樣はます〳〵御元氣にて、弟のもりや炊事の御世話をなされ候。いつもの通り目鏡もかけずに縫物をせらるゝは來る人皆驚き候。手代・小僧もかげひなたなくよく働き、店は相變らずはんじやうし、御送りの新柄はことの外評判よろしく候間何事

日用文●候文のみにして、話語體の文を示さず。故に、各文につき、一々お話にして言うてみよ。

順序●(1)父の手紙に對するあいさつ。
(2)家内のやうす。
イ一同かはりなき事。
ロ弟の全快(父が氣にかけて居るだう)
ハ祖母の元氣(父は親思ひだ

も御安心下され度候。暑さ日に増し候へば、何とぞ御身御大切にあそばされ、一日も早く御用御すましの上、御歸宅の程御待ち申上候。以上。

八月十五日

父上樣

孝一

猶々、かねて御願ひ申上候飛行機模型、何卒御忘れなく御みやげに頂き度願ひ上候。

設問。左の題にて作れ。

旅行先より家に送る手紙。

第二　暴風雨見舞の文　（巻九、第二十一課に倣ふ。）

拜啓。連日の暴風雨にて、當地の如き山の手にても被害少からず候へば、昨年の例もあり、御地は如何と御案じ申居り候ところ、本日の新聞により、御地方海岸は一圓の海嘯にて、死傷も少からざる由驚き入り候。御一家御無事に御座候哉。先は取りあへず御見舞まで申上候。

敬具。（以下、月日、氏名を省く。）

設問。左の題にて作れ。

火事見舞の文。

第三　病氣見舞の文

拜啓。しばらく御缺席に付如何かと御案じ申居り候ところ、御病氣の由承知致し、驚き入り候。昨今の御容體如何に候や。「病は心がら」と申す諺もこれあり候へば、心丈夫に御療養なさるべく候。

追々時候も好く相成り候上、有名なる醫師に御かゝり

---

(3)藥缶から)イ雇人のこと。ロ商業員。(3)終のことば。附おみやげのおねたり。

●順序●(1)山の手でもひどいから、どんなにかとのおもひやり。特に去年の例もあるから。(2)新聞で、いよいよ心配。(3)御宅ではどうか、案ぜられる。(4)終の語。

●順序●(1)休まない人が休んだから、ハテナと心にかゝり聞けば御病氣との事。(2)どんな御やうすか。(3)はげます言葉。(4)病友をなぐさめるやさしい厚意。(5)終りの言葉。附遠い所●近くも都合によりて手紙は以下の外の心得迄である。日用の手紙はなるべく分りやすく書け。

(3)よく序順を立てよ。

(イ)用向は順序よくならべよ。(ロ)大切な要點と、つけ加へて書く事との區別を立てよ。(ハ)あいさつの言葉に自分の方を先にし、先方を後にするやうなことのないやうにせよ。

(4)人と場合に相當した言葉を用ひよ。

●言葉の區別は後に示す。

▲(二)手紙の書式

(1)文字は分り易く、叮嚀に書け。文字のつりあひに

注意せよ。
(2)天地(上下)と前後とを程よくあけよ。
(3)最終は文句の始めて繼ぐこと。
(4)なるべく、先方の稱呼は行の頭に、候・間・由などは行の尻に書くやうに注意せよ。
(5)連名の時は、差出人の方は下の人を前に、上の人を後に書き、宛名の連名は其の反對にせよ。
(6)文面を内にして、末より巻け。幅は封筒に入れる位にすること。
(7)左の上の肩に切手を貼るやうにすること。
(8)同じ府・縣・郡・市内等に出すものは、府下・縣下・郡内・市内等と記すこと。

(三)自他の稱呼

呼び方は多くあれども、小學六年生位の稱呼を示す。

(1)自分のことをいふとき。

●(父母・先生に對して)
私

●(兄姉・他の目上に對して)
私

●(弟妹・目下に對して)
自分

●(朋友などに對して)
私・僕・自分・拙者
附「私」は一般に誰にでも用ひてよし。

(2)對手にいふとき。

●(父母に對して)
御父上様・父上様・御母上様・母上様・御兩親様

●(祖父母に對して)
御祖父様・御祖母様

第四　入營する友におくる（巻十、第八課に倣ふ。）

拜啓。來月一日にはいよ〳〵御入營の由、かねて御覺悟の事とて、御本懷の御儀と察し上げ候。御一家はいふまでもなく、實に一村の名譽に御座候。申すまでもなく、御入營の上は、品行方正、職務に忠實にして、隊中の模範となられ度、私も行く〳〵當師範學校を卒業致し候上は六週間現役に服すべき身分に候間、時々營内の樣子御報知下され度願上候。右御祝ひまで申上候。

敬具。

設問。左の題にて作れ。

歸國する友人に送る手紙

第四　友人の入學を祝ふ文

拜啓。首尾よく成績御優等にて、第四中學に御入學の由、平素御勉學の然らしむる所、さぞ御滿足の儀と賀し上げ候。これまでよりは學科も高尚にて、諸所より集まれる秀才も多きこと、存じ候間、一層健康に注意せられて御勉學なされ候やう希ひ候。取りあへず御祝ひまで申上候。以上。

(1)假定。カリニキメル。
(2)此の文は今の諸君の年配でなくしてある。實面は實際の通りにするがよいけれども、たまにかやうな文を示した。
(3)諸君の今の年配の文に直してごらん。

順序
(1)成績優等で入學した祝の言葉。
(2)入學後の注意。

希ひ。ノゾム。

●試驗及第を祝ふ文　（坪内博士）

拜啓。首尾よく御及第御入學の由、さぞ御滿足の儀と一同賀し奉り候。御約束の兵學校制服の御寫眞、一日も早く拜見致したく候。早々。

設問。左の題にて作れ。

小學校卒業を祝ふ文

第五　入學を祝はれたる返事

拜復。御手紙ありがたく拜見致し候。全く僥倖にてやうやく入學出來候に、過分の御言葉に接し赤面致候。今後は仰に從ひ、十分健康に注意し、一層奮勵仕るべく候。右取あへず御禮申上候。早々。

設問。左の題にて作れ。

（1）海軍兵學校に入つたことが分る。
（2）入學したら、制服の寫眞を贈る約束したことも分る。

●（伯叔父母に對して）
御伯（叔）父樣・御伯（叔）母樣・伯（叔）父上樣・伯（叔）母上樣

●（兄姉に對して）
御兄（姉）上樣・兄（姉）上樣

●（弟妹に對して）
其許・御身・あなた

●（敎師に對して）
先生

●（朋友などに對して）
君・貴君・貴兄・尊兄・大兄・貴下

（3）他人に對して、自分の關係者をいふとき。

●（自分の父母をいふとき）
父・家父・老父・亡父・母・家母・老母・亡・父母・兩親

●（自分の祖父母）
祖父・祖母・祖父母
附…伯叔父母は此にならつて知るべし

●（兄・姉・弟・妹）
兄・家兄・舍兄（シャケイ）・姉
弟・愚弟・舍弟・妹・愚妹

（4）他人に對して、其の關係者をいふとき。

●（他人の父母）
御父君・御尊父樣・御親父樣・
御母君・御母堂樣・御兩親樣

●（他人の兄弟）
御兄樣・御兄上樣・御尊兄樣・
御姉君・御姉樣・御姉上樣

●（他人の弟妹）
御弟樣・御令弟・御妹樣・御令妹

卒業を祝はれたる返事

第六　案内文　（卷十、第二十五課、講話會の案内文を見よ。）

（六年生作）

拜啓。來る廿一日（日曜）午後一時より神田錦輝館にて、同鄕會相開き申すべく候。當日は○○先生の講話もこれ有り候間何卒御出席下され度願上候。次に御來會の有無は十九日まで○區○町○番地○○方に候知らせ下され度候。敬具。

設問。左の題にて作れ。

同級會の案内文

第七　招待狀

●要件。
日。
時間。
開く場所。
會の重な事項。
返事の場所。
●附
必要により會費の事を記せ。

▲(四)住　居

(1)自分の住居をいふとき。
私宅・拙宅・當方・私方・弊家・小屋・小店・弊店・弊社

(2)對手の住居をいふとき。
御宅・貴家・尊堂・高堂・御住居・貴店・貴社

▲(五)土　地

(1)自分の土地をいふとき。
當地・當所・當方・弊地・當府・縣・市・郡。本……。弊村

(2)先方の土地をいふとき。
御地・御地・貴方・貴縣・御府……。等

其の一（巻十二、第十五課、其の一に倣ふ。）

拝啓。來る十五日は私の誕生日に付、同年の友人數人を招き、心ばかりの祝ひ致度と存候、何も御馳走はこれなく候へども、晩餐後父の詩吟、私の劍舞、其の外餘興の工夫致居候間、何卒當日午後四時までに御出で下され度御案内申上候。以上。

●右返事

拝復。來る十五日の御誕生祝に御招き下されありがたく存じ候。御申越の時刻までには必ず參上致すべく、御催しの餘興は今より樂に相待ち居候。右御返事申上候。

草々。

設問。左の題にて作れ。

祭禮に友を招く文

要件●
招くわけ＝誕生祝。
日。
餘興。（子供の祝にふさはしい）
時間。

順序●
(1)題の言葉。
(2)參上する。
(3)其の日が待ちかねる。
(4)終の言葉。

▲(六)手紙の始と終とにつける語

(1)始めにつける語
拝啓・拝呈・謹啓
拝復（返事のときに）

(2)終につける語
敬具・敬白・頓首・以上。草々

▲(七)宛名の下に用ふる敬語

様（朋友・親友など親しき間に）
殿（敬を主とするとき。又は目下に）

●殿字の書き方によりて尊卑の別をあらはす習慣あり。

君（朋友）
御中（團體に）
先生（恩師又は學者に）

右返事

其の二（讀本に倣ふ）

拝啓。來る○○日は亡父○回忌に相當り候に付、午後○時○○寺に於て法會相營申すべく候間、御多用中恐入候へども、御參列成し下され候はゞ、有り難く存じ奉り候、敬白。

設問。左の題にて作れ。

法會の招待狀（自宅に招く時の文）

要件●
招く趣意＝法會。
日●時。
場所。
招待の言葉。

順序●

第八　問合文

其の一（入學試驗期日の問合）

拝啓、益々御壯健にて御勉學なされ候由賀上候。私事

閣下（將官・高官の人）

▲(八)脇附（ワキヅケ）の語

(1)本文に書くもの

侍史（目上に）

机下・貴下・座下（少しく目上の人又は同輩に）

猊下（ゲイカ）（僧侶に）

膝下（父母に、なつかしい恩師に書いてもよし）

御許（母や姉に）

各位（連名のときに）

(2)封筒に書くもの

親展・御直披（他見をはばかる時。故にハガキに親展などゝ書いてはならぬ。）

至急・大至急・急用（急ぎの場合に）

平安・平信・無事（通常の手紙に）

貴答・貴酬・御返事（返事に）

此度尋常科卒業することに相成候間、志望の通り御校に入學致度候に付、御手數ながら入學試驗期日御知らせ下され度願上候。學力も乏しく準備も不十分に候へども、かねての御勸もあり、先生よりも勵まされ候へば及ばずながら受驗の覺悟に御座候。先は御願まで。

草々。

●右返事

拜復。いよ〳〵御志望御決定の由賀し上候。試驗期日は不日公報及び新聞にて發表すとのことなるが、來月二十五日より三日間施行の事に內定せる趣、事務所にてたしかめ候間、取りあへず御知らせ申上候。かねて御優等の貴君なれば御合格疑ひなく候も、なほ御油斷なく御勉強なされ候やう希ひ候。以上。

順序
(1)あいさつ。
(2)期日は發表になるが。
(3)事務でたづねた。（親切）
(4)はげます言葉。

(1)あいさつ。
(2)入學の望。
(3)期日をきく。
(4)一しやうけんめいにうけます。
(5)終の言葉。

設問。左の題にて作れ。

入學手續を問合する文

同返事

其の二（地圖發行所問合）

拜啓。いつぞや拜見致候滿韓地圖は何れにて發行したるものに候や、私も一部買求め度候に付、御手數ながら御知らせ下され度御願ひ申上候。草々。

●返事

拜復。御申越の滿韓地圖の發行所は何區何町何番地何堂に候。數種ある中にて本地圖は最もよしとの事、地理の先生より承り候。拜答。

設問。左の題にて作れ。

要件
(1)用向は品物と變る店とだけで簡單なり。
(2)御手數……言葉でいいにたのむ

要件
(1)發行所、だけが主眼なり。
(2)よい地圖。問はれぬこととなるが、そこへ親切に。

綴方自習書發行所を問合する文

同　返　事

試驗及第を恩師に知らせる文

謹啓。益々御きげんよく入らせられ候御儀と賀し奉り候、

愚鈍の私に候へば入學試驗の成績如何と案じ居候處、幸ひに合格致候事本日相分り候。是皆山よりも高く海よりも深き先生の御恩によることゝ存じ、厚く御禮申上候。

此の後は一層勉強し智德をみがきて、御高恩の萬一に報い奉らんと覺悟致居候。

何れ近日參上仕るべく候が、取りあへず御知らせまで

申上候。敬白。

設問。他所にある兄に試驗及第を知らする文

貸したる品物の催促文

第九　貸したる品物の催促

拜啓。算術練習中ふしんの所これあり、急に先日御用立申候數學字書の入用相生じ候間、何卒一時御返し下され度、御入用の節はいつにても差上げ申べく候。右勝手なること申上げ候が御ゆるし下され度候。草々。

●右返事

拜復。御大切の數學字書永々拜借致し、ありがたく候。とくに御返し申上ぐべきのところ、御催促にあづかり御申譯これなく候。御使の方に差上候間御改め下され度候。何れ御目にかゝり御禮申上ぐべく候。以上。

---

(1)あいさつ。
(2)合格が本日分りました。
(3)先生の御かげと禮をのぶ。
(4)今後の覺悟。
(5)分るやいなやすぐ先生に知らせる。

順序

注意　貸した品を催促する時は、先方に惡く思はせぬやうにせよ。

順序
(1)禮や。
(2)御返しすべきに御催促をうけて御申譯がない。

設問。左の題にて作れ。

貸置きたる雑誌の催促文

第十　日用文語と話語との對照表

話語文	話語	文語
、	、	、
致候	イタシマス	イタシマセヴカラ
仕候		仕るべく候間
致すべく候	イタシカチマス	イタシカチマセウ
仕るべく候		仕りかね候間
致度候	イタシヤイカラ	イタシマスマイ
仕度候		仕るまじく候間
致候間	イタシタイ（……タウゴザイマス）	イタシタイカラ（……タウゴザイマスカラ）
仕候間		致度候間 仕度候間
致すまじく候	イタシマスマイ	イタシマシタカラ
仕るまじく候		致候間 仕候間
かね候	カチマス	ダサヴデ
		の由。（オモムキ）
候へば。（候間●候故）	ダカラ	候に付●候故

●話語を日用文語に直すに、分らぬ時は此の表を見よ。

●●候間は「候に付」又は「候故」「候へば」としてもよし。

同じ語がいくつもつく時は變化して用ひよ、「候まい」は女子用語。

(3)さしあげる
(4)御目にかゝって御願を申上げる

ゴザイマスカラ	御座候へば。（候間●候故）候に付●	
ゾンジマス（オモヒマス）	存候 存じ奉り候	
ナリマシテ	相成り	
ナリマシタ	相成候 相成申候	
ナリマシタカラ	相成候間	
ナリマセウカラ	相成るべく候 相成申すべく候間	
ナサッテ（アソバシテ）	なされ 遊ばされ	
ナサレタイ（ナサレタウゴザイマス）	なされ度候（遊ばされ度候）	
ナサイマセ	なさるべく候 あそばさるべく候	
シテクダサッテ（ナスッテイタダイテ）	なし下され なし下されて	
ナスッテイタダキタイ（……タウゴザイマス）	なし下され度候	
シテクダサイ（ナサッテクダサイマセ）	なし下さるべく候	
ナリマセウカラ	相成るべく候間 相成申すべく候間	
クダサッタ	下され	
クダサッテ	下され候	
クダサレタイ（クダサレタウゴザイマス）	下され度候	
クダサイマセ	下さるべく候	
マウシマス（マウシアゲマス）	申候 申上候	
マウシアゲタイ（マウシアゲタウゴザイマス）	申度候 申上度候	
マウシマセウ（マウシアゲマセウ）	申すべく候 申上ぐべく候	

マウシマセン	申さず候
マスカラ	候間●候に付●候故●候まゝ（上欄ヲ見ヨ）
マウシカネマス（マウシアゲカネマス）	申しかね候　申上げかね候
マスナ	まじく候
ナザイマスカ、マセンカ	まじくや「否や」　まじく候や
マシテハ	候へば　候ひては（候うては）
マセンデハ	候はずは
ゴザイマス（ゴザイマシタ）	御座候
アリマス（アリマシタ）	これあり候
アリマセン（ゴザイマセン）	これなく候　御座なく候
アリマスカラ（ゴザイマスカラ）	これあり候間　御座候間
アリマセンガラ（ゴザイマセンカラ）	これなく候間　御座なく候間
デスケレドモ（デズガ●ダケレドモ●デアリマスケレドモ）	候へども
ダカラ（デアリマスカラ）	候へば　候間●候に付●候故
デアルナレバ（デアリマスナラバ）	候はゞ
デアリマスカ（デゴザイマスカ）	候や（候か）　御座候や（……か）

◉候の用法

日用文語	話語
候	マス
候ところ	マシタガ
候へども	マスケレドモ
同	マシタケレドモ
候間●候に付●候故。候まゝ（文）	マスカラ
同	マシタカラ
候由●候趣	マスサウダ
同	マシタサウダ
候や	マスカ
まじく候	マスナ
候やう	マスヤウ
同（候ひしやう）	マシタヤウ
候て	マシテ
候ても●候とも	マシテモ
候儀●候段●候事●候旨●候趣	マシタコト

第十一　練習文

左に示すは、皆六年生が作つた文の中から、ぬき出したもので、どれも直すべき疵（キヅ）があります。諸君は「第十」の表と、前に示した文例に照して、悪い所を考へ、立派な文に直して御覧。

○をつけたのは、「展覧會見物に誘ふ文」の中から、

●をつけたのは、「紅葉狩に誘ふ文」の中からぬき出したのです。

(1) ○君も御承知のかの展覧會は、

(2) ●新鮮なる空氣を吸ひ面白く遊ばうと思ひ候。

(3) ●貴君おひまなれば……朝六時に我が家に……

(4) ○來る十八日（土曜）の晝から見物に行き度……

(5) ●貴君は御同行如何に候や、御伺ひ申上候。もし小生と共に御同行の由は御返事御一報下され度候。

(6) ○文部省の美術展覧會開催致し、十九日を以て閉會なる由。

(7) ●貴君も小生と御同行仕ればいかゞと存じ候故、もし小生と御同行なされば前の時刻に我が家に來て下され度候。

(8) ●御用これ無き候の節は。

(9) ●私は參るつもりにて候、貴方も何卒御出下され度候。

(10) ○人のうはさも高く、又有益なる見物に候由。

(11) ●今週の日曜日を期して、一日を高尾に送らんと存じ候間、御さしつかひ無ければ、日曜日の朝遠足支度にて……

(12) ○私は一同と行かんと思ひ候はゞ、あなたも御行になれば、私一同のものと御一しよに御行になれば……

(13) ●君も僕といつしよに居つては如何に候や。

(14) ○來る十九日には終るとの話にて候らはゞ、

(15) ●御同行致し度候。御同行致さるゝ節は、……

(16) ○十八日正午より御同行いたし候や。敬具。

(17) ●紅葉がりに行きたしと存じ候はゞ、君もまいり候や。

(18) ○來る十九日にて閉會に御座候はゞ、

(19) ●小生は無風流に候へば何の風情（フゼイ）も之なく候へども。

(20) ○今頃は燈火したしむ頃と相成候。

右の添削（テンサク）

(1)「君も」をとる。――日用文は相手と話をする代りに文に書くもので
あるから、「御承知の」といへば「君も」といふ事がなくとも分るから、
かういふ時は省（ハブ）く方が多い。

(2)……遊び度存候。

(3)「貴君」をとる。「我が家」を「拙宅」とか、「私方」とかに直す。

(4)「晝から」を「午後より」と直す。「行き度」は「まゐり度」の方よし。

(5)「貴君は」をとる。「もし」以下をけづり、「御都合如何に候や、御返事下
され度候。」とあらたむ。

(6)文部省開催の美術展覽會は、十九日限り閉會の由、

(7)御同行如何に候や、御同意に候はゞ、前時刻までに、道順に付、何卒
拙宅に御立寄下され度候。

(8)御用これ無く候はゞ。又は、御ひまに候はゞ、

(9)見物致度候間、何卒御同行なし下され度候。

(10)……又有益の由、

(11)「さしつかひ」は「さしつかへ」。後の「日曜日の朝」をけづり時間を入れる。

(12)（大分まづい。かやうな書き方をする人がよくある。前の表を見て、其の區別
見物致度存候へば、御同行如何に候や。
「候はゞ」と「候へば」のまちがひはよくある。）
を知れ。

(13)御同行如何に候や。

「いつては」は「行つては」なり。「居」にあらず。

(14)來る十九日限り閉會の由に候へば、
又「候はゞ」と「候へば」のちがひ。

(15)御同行致し度候。御同意に候はゞ、

(16)十八日正午より御同行いたし度、御都合如何に候や、伺上候。敬具。

(17)……まゐり度存じ候へば、御同行如何に候や。

(18)前の(14)を見よ。

(19)「何の風情もなく」といふ意味をちがへて居る。（人を招待する時など

に、何のおもてなしもないがといふ時に用ふる語。）

小生は無風流に候へども、寫生用具たづさへ御同伴致し度、……

20）「今頃は」をけづる。「したしむべき頃」と直す。

◉四十四年度試驗問題（東京府下の學校）

▲高等師範學校附屬中學校

●わが好める事物（文體隨意）

▲府立第一中學校

●余が卒業したる學校

▲府立第二中學校

●兒島高德

續編　入學試驗問題

次に、明治四十四年度入學試驗作文問題の中、多く出た題、又は本書が前にあげた文に似よりの少い題につきて作例を示す。

第一　我が家（此の題は、開成中學・第二高女・第三高女と都合三校の試驗問題。）

世の中に樂は多けれども、一家睦（ムツマ）しく團欒（クンラン）する樂より大なるはなかるべし。

父は某官衙（ソレカンガ）に職を奉じ、（實際の職業を入れてみよ。）常に、「人の高下（カウゲ）は職業によりて分るゝものにあらず。自己の職業を忠實に盡す人は最も尊きものなり。」と言ひて、十年一日の如く多くは、徒歩（カチ）にて通勤し、母は炊事（スヰジ）裁縫何くれとなく一家の內を治め、物見遊山（ユサン）などをすゝめられても、「我が家より樂しきはなし。ことに祖父樣御丹誠（ゴタンセイ）の植木（ウヱキ）を居なが

●團欒　マトヰ（一家內ニイフ。）
●某官衙　アル役所。
●忠實　マジメ。
●徒歩　カチ。

▲開成中學校
●我が家（普通文體）

▲女子師範學校豫科
●土産物を貰ひし禮狀（候文體）

▲第一高等女學校
●富士山
●母の誕生日にいとこを招く

らなかめ得る幸福あるをや。」とて、早くより晩くまでいそ〳〵と働かる。今年七十の祖父は、腰も曲らず、齒もかけず、草木の培養と謠曲とを無上の樂とし、私を頭に弟と妹とは互に仲よく助けあひ、今は三人共に同じ學校に通ひつゝあり。何事も自分の事は自分にてする習慣にて、四年の弟は言ふまでもなく、八歳の妹まで靴を磨き袴をたゝむやうになりたり。一人の下女また蔭日向なく忠實に働く。

中にも樂しきは誕生日の祝なり。一家中の誕生日には、夕食の時最も好む料理を頂く例にて、一同先祖の靈に禮拜して後食饌に向ひ、愉快に話しながら食す。祖父と父とは定量の酒を汲みかはし、祖父は見る〳〵大黑天の如き顏になりて、得意の謠をは

諷曲●ウタヒ。
無上●コノウヘモナイ。
妹●一年生ノコトガワカル。
定量●キマツタブンリヤウ。
大黑天●ダイコクサマ。

▲第二高等女學校
●我が家

▲第三高等女學校
●我が家（文體隨意）
●入學試驗の模樣を先生に通知する文（前に同じ）

▲三輪田高等女學校
●轉居を報ずる文

じめ、かくて調子づけば平素無口の父までが詩吟などをし、我等兄弟も亦唱歌をうたひなどして其の夜を過す。實に樂しきは我が家なり。（將來のかくごを短くかきそふるもよし。）

次に、小兒の模範としてはあまり適當ではないけれど、有名な坪内博士の作られた文を示す。

第二　我が家　（坪内博士）

家は十坪に過ぎず、庭はたゞ三坪のみ。誰か言ふ狹くして且陋なりと。家陋なりと雖膝を容るべく、庭狹しと雖碧空仰ぐべく、歩して永遠を思ふに足る。

庭に一株の老李あり、春四月の頃ともなれば青白き花開きて樹に滿つ。風ある日には青々と霞める空より白き花ちら〳〵と舞ひて、一家須臾にして雪を散らす。

隣家に花樹多し、風に從ひて飛花わが庭に落つ。紅雨霏々として降り、白雪紛々として舞ひ、見るがうちに滿庭

構成
第●●一段＝家は最も大なる事。
第●●二段＝我が家のありさま。
第●●三段＝樂しきことに事。
第●●四段＝むすび。
第●●一段―我が家の大體。（狹クルシクモト樂ガアル。）

陋●ムサクルシイ。
永遠●ズツトサキノコト。

▲實踐女學校
●野遊（普通）
●花見に友を招く文（手紙文）

▲青山學院豐島師範豫科
●わが鄉里（口語體）
●友人が師範學校に入學せしを賀する文（候文）

▲府立染織學校豫科
●病氣全快を通知する文（口語體）

花の衣を着く。仔細に見れば桃の花あり、櫻の花あり、椿・山吹・李の花あり。

屋後に一株の銀杏あり、秋深くして滿樹黃金よりも黃なり。木枯の風起れば、かぐや姫の扇にせまほしき其の葉翩々として翻り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一面に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、千金と人はいふなる錦を吾は庭に敷きぬ。木の葉落ち盡しては流石に淋しげなれども、日影月影いよ〳〵多くなりて、空を見、星を見るに障碍きは嬉し。

○チッケタト コロニ キヲツケ ●家●庭ト二本柱ヲタテタヤウデアル。
●第二段＝庭の李。
●老李 フルイスモモノ木。
●須臾 チョツトノマ。
●第三段＝隣家より敢り來る花。
●霏々 チラチラト。
●紛々 イリミダレテ。
●仔細に コマカニ。
●第四段＝秋の落葉のおもむき。
●かぐや姫 竹取物語といふ本にある故事。
●翩々 ヒラヒラ。
●千金と人はいふなる錦 錦（其ノ價高ク人ハ千金トイフ。美シイ落葉ヲタトヘテイフ。）
●第五段＝冬のおきむき。木ノ葉が落チツクセバ、サビシイケ

▲大倉商業學校
●旅行中の父に歸宅を促す文

第三　わが好める事物

●此の文を作る注意

一、好む事物をありのまゝに書くこと。好む事物で其の人の性質が分る。たとへば、活潑な人と靜かな人て、其の好みがちがふやうなものてある。

二、どんなに好むかといふ事があり〳〵と分るやうに書きあらはす事。

三、次に、著者が小兒の時の事をおもひ出して、今も忘れぬいかにも樂しかつた事を綴つて御目にかけます。（私が小兒の時のつもりで書きます）。一寸申し置くが、私は小兒の時は氣が弱くておとなしい方てした。今は大分變つて居りま す。

僕は、とかく氣の弱い方てすが、ふしぎにも擊劍（ゲキケン）と水泳（スヰエイ）が好きで、（●文語ナラバ、擊劍と柔道とがトスベシ、）此の外は多く女子供のやうな靜かな事ばかりをしてゐま

す。中でも、庭に草花を培養する事は此の上もない樂です。

僕は庭を種々に工夫し、細い木を七八寸づゝに切つて、柵（サク）のやうに頭を揃（ソロ）へて地面にうちこみ、或は方形に、又は圓形●楕圓形（ダエンケイ）などに區劃（クカク）し、裏の畑からよい土を持ち運んで、細かに碎（クダ）き、七八町もある河原から奇麗な砂や小石を小車で運んで、土の上に撒き、其處に美しい珍らしい草花を植ゑて、朝夕草を取つたり水をやつたりして、やがて美しい花の咲くのを指折り數へて待つて居ます。

僕は赤●白●黃●紫●絞（シボリ）など美しく咲いた花は何れも好きですが、芍藥（シャクヤク）や牡丹（ボタン）が角のやうな芽を出したのと、まだ咲かぬ福壽草と、それからまつもとさう（僕ノ地方デヨブ草ノ名）とて、夏の眞盛に黑みをもつた深紅の花が、また蕾の中にぎら〳〵日に輝いて金色になるのと、それから、鷄頭（ケイトウ）や虎の尾の葉の尖（サキ）が少し紅葉したのとが、とり分け氣に入つて居ます。

學科の復習などをして疲れた時は、椽（エンガワ）側の端にある布袋竹（ホテイチク）と南天の葉の青い色を見ると、急に心がゆつたりとして、生き〳〵して來ます。其の青い葉が露や雨などに濡れれば、（文語●●●

省いてもよい所＝第一・第四段・第五段。

二、右の例にならつて、諸君の好きな事物について作つてみよ。

第四　余が卒業したる學校

●注　意

一、本題は、第一中學校の入學試驗で、習字と合せて、一時間に作らせられたるのですから、約三十分位で作らなければなりません。

二、故に、短文を作る時の例を示す。

附。本文は頭括式による方が作りよい。

三、此の文を作るには、國語讀本卷十一、第廿七課、平和なる村。と、同卷十二、第九課、學校落成式を參考せよ、

●三段落の例を示す。

●第一段落＝頭。

余は、本月二十五日（此は尋常科を卒業して、すぐ入學試驗を受けた人。年卒業の人は、「昨年三月廿五日」等とすればよし。去）東京市何尋常小學校を卒業せり。（東京市の公立小學校は、頭に東京市とつけなければならぬ。）

●第二段＝位置・沿革。

例。母校は何區何町何丁目にあり。明治何年何月何日の創立にして、爾來（ソノ）（後）卒業生を出したること約何千何百人、官吏・軍人として、實業家として、又、美術家として、教育家として立ちて成效せる人多く、中にも誰々氏の如きは其の名世に著はる。良妻・賢母として家を治め、教育家として立ちたる女子も少からず。

●第三段＝現在のありさま。（校長・教員・生徒・校風・校舍等）。

例。現時の校長は誰先生にて、何年より勤續せられ、先生は總べて何十何人、何れも熱心・懇切に教育せられ、約千何百人の生徒は、一般に愛校の念深く、質素・勤勉の風あり。（作り事を書くな。）學級數は幾何あり。校舍は二階建にて、何

年の建築なれば、今は頗る舊びたるを以て、近く改築の擧あるべしと聞く。（或は、「昨年改築せられたり」。「何年の新築なり」。等、實際の通りに書け。）

備考

●**富士山**。（第一高女）の如きは、多くの作文書にあり。

●**わが郷里**。（青山師範學科）は、前出「我が家」及び、讀本「平和なる村」等にならへ。

●**野遊**。（實踐高女）は、本書記事文にならへ。

第五　書物の借用を乞ふ文　（以下日用文）

●**注意**

一、他人の本はみだりに借りるべきものでない。ことに、教科書は先方で必要のものであるから、借りにやるべきでない。

附。ところが、此の題で作らせてみると、同學年の友人に教科書を借してくれと書く人が少くない。實際にあるまじき事を作つては何にもならぬ。

二、雜誌や繪本などの貸借は諸君の間で實際あるが、それも、近所なれば自分で行くのは普通であるし、又、郵送するやうな遠方から本を借りる事は、諸君の時代にはまあ無い事である。

三、女子であれば、自分で出歩くよりも、女中などをやる場合が多いから、普通に學校でおけいこするやうな手紙で本を借りる事も多いだらうが、男の小兒の實際からいへば、此のあたりまへのやうな手紙を書く場合があまり無いのです。諸君は日用文を作る時は、實際の場合にあてはまるやうにするのが必要である。

四、そこで、本書では、男兒の文として、實際あつた場合の例を示しました。（名は變名にした。）

實際の場合
1. 他區に住んで居る從兄（イトコ）。（母同志が姉妹）
2. 母が其の家に行つた時、幸便（カウビン）でたのんだ。
3. 本は、二宮金次郎の少年時代。

おひ〳〵寒さに向ひ候處、益々御健康にて御勉強の由賀上候。當方の狀況（ジヤウキヤウ）は、母よりくはしく申上ぐべく候が、一同無事に候間御安心下され度候。さて、先月參上致候節拜見仕候二宮金次郎の少年時代といふ本、なほ熟讀（ジユクドク）（トクト）（ミル）仕り、自分の模範ともし、弟妹等にもよく話

し度候間、何卒母に托し御借し下され度（母を使にするのではない。母より何か用があるならばと言はれたので、どうか武雄君に此の手紙を、そして、本を借りて下さい。と願つたのである。此はありがちの事で。失禮したのではない。）幸便にて願上候。草々。

（大切にして、見終つたら、すぐ返すなど云かぬ。そうするのはあたりまへだから。）

十一月二十五日

武雄君

太郎。

（封筒には、共に氏名をかけ。）

第六　轉居を報ずる文

●注意

一、父母の代理で書く事と、自分で友人などに通知する事とあり。

二、父母の代理の時は、普通通知先が多く、且、轉居の通知だけが目的であるから、用向を簡單に書け。よけいな事はいらぬ。

三、自分が二三の親友などに通知する時は、「新住居をさがし易い目標（メジルシ）とか、「遊びに來て下さい」とか、少しでいねいに書くがよし。

其の一　（父の代理）

拜啓、此度何區何町何丁目何番地に轉居仕候間、此段御通知申上候。敬具。

其の二　（自分の親友などに）

拜啓、私方（自分が他人の家に寄宿して居る時は、私方も、私も不用。學校に通ためふに、自分だけ轉居する事もあるが、一家の轉居とす。）此度何區何町何丁目何番地に轉居致候。（自分のみの轉居の時は誰方と入れよ。）此度の住居は何々邸のすぐ先隣（サキドナリ）にて、近傍には何神社あり、紅葉の眺めもよき所に候間、御散歩ながら御來遊下され度、御通知かたく申上候。以上。

第七　外の諸題

前に示した日用文三種の外の試驗問題は、本書の下篇にある文例にならへば、たやすく作る事が出來るから、左に、どの題はどの文例によるべきかといふ關係だけを示す。

●友人が師範學校に入學せしを賀する文（青山師範豫科）

本書。 下篇、第四、友人の入學を祝ふ文。

●旅行中の父に歸宅を促す文。（大倉商業）

本書。 下篇、第一、旅行中の父に送る手紙。

注意。 非常な急用とか、病人とかのために父の歸宅を促す時は、電報を發するがあたりまへであるから、本文は、さやうな大事な場合ではない。

そこで、何でも父が早く歸れば都合がよい位の用向、たとへば、農家ならば「米の買入を申込まれてあるけれども、父が留守できめかねる」とか、商家ならば「取引先の誰樣が出京して何日頃まで居られるが、なるべく早く御目にかゝりたいとの事」とか、實際あり勝の用向を假定せよ。

それから、「父は他鄕に旅行中は、家の事を心配して居られるから、なるべく心配をかけぬ注意が必要である。しかし用向の手紙には、外の事は簡單に書け。

●母の誕生日にいとこを招く。（第一高女）

本書。 下篇、第七、招待狀の中。

●入學試驗の模樣を先生に通知する手紙。（第三、高女）

本書。 下篇、第八、最後の文。

●花見に友を招く文。（實踐女學）

本書。 下篇、第七、招待狀の中

（終）

明治四十四年十二月十五日印刷
明治四十四年十二月十九日發行

不許複製

受驗參乃奧術
一定價金貳拾錢

著作者　小關源助　東京市牛込區早稻田鶴卷町四十三番地
發行者　仙石衣枝　東京市牛込區水道町二十五番地
印刷者　福山福太郎　東京市牛込區水道町二十五番地
印刷所　福山印刷製本所

發行所　東京市早稻田鶴卷町四十三番
振替貯金口座東京一四二五五
三友堂書店

賣捌所　全國有名書店

267
494

最新刊

高等學校入學試驗

數學受驗叢書

早稲田高等學院講師 佐久間謙 共著
早稲田高等學院講師 高見豐

全四冊完結▲四六版總クロース綴金文字入美本▲毎冊分賣定價一、三、四卷各六十錢▲二卷七十錢郵送料各六錢（郵券代用必一割增）

第一卷 代數學之部
第二卷 幾何學之部
第三卷 三角法之部
第四卷 算術之部

◉本叢書の三大特色!!

一 高等學校其他諸官立學校受驗者の爲めに數學受驗に關する注意は細大漏らすことなし

二 過去十數年間に行はれたる諸官立學校入學試驗問題中より必要なるものを選び、悉くこれに模範的解答を附し、又將來に於て提出せらるべしと豫想せらるる問題は詳細に而かも懇切に論述せり。

三 本叢書編述の唯一目的は、學生をして官立諸學校入學試驗科目中最も困難なる數學科試驗に登第せしめんとするにあるを以て、專ら受驗準備用として必要なる事項のみを精選し、試驗に不必要なる項目は一切之を掲げず。

發行所 東京牛込區早稲田鶴巻町 二友堂 振替東京一四二五番

104

好評嘖々たる良著述

實驗修養 心身強健之秘訣 改版五版

藤田靈齋著

洋裝全二冊 定價特製壹圓五拾錢 並製壹圓拾錢 五百餘頁 郵稅十二錢

婚姻 再版

早稻田大學女子大學講師 法學博士 浮田和民●松村介石序●奧田小軒著

洋裝全二冊 定價五十錢 二百十頁 郵稅六錢

高等卓上野球 考案

早稻田大學野球部閲●淺若謙二略畫 塗板畫

全一冊折本 定價十八錢 郵稅二錢

捷徑

東京美術學校教授 白濱徵序●百瀨四郎著

全一冊日本紙刷 定價二十錢 郵稅二錢

公式全書 三角法之部

小山作之助閲●杉江金之助編

數理講究會編

洋裝袖珍 定價八錢 郵稅二錢

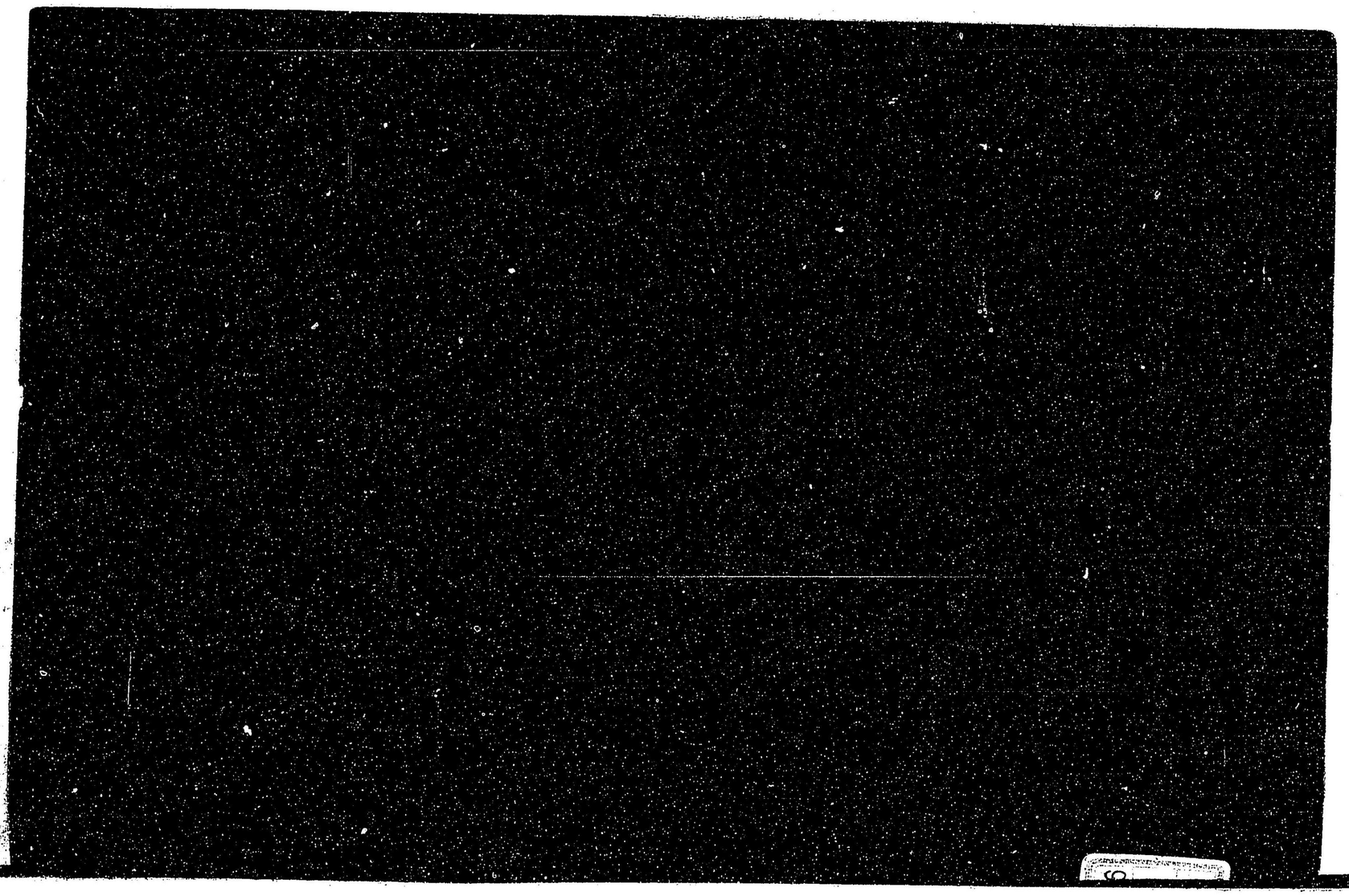
唱歌帳 九版

洋裝各一冊 定價（二四年用六錢 五六年用七錢 高等用八錢） 郵稅各一錢

發行所 三友堂書店 東京振替口座 牛込區早稻田鶴巻町一四二 電話番町五五番

新刊 算術之部 幾何學之部 三角法之部 公式全書 三友堂

發行所 三友堂 東京牛込 早稻田 電話番町五五番



049820−000−5

特26−30

中学校高等女学校幼年学校実業学校

入学受験綴方自習書（六学年自習用）

小関　源助／著

M44

BEM−0552